
桜花と六花

blue birds

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜花と六花

【Nコード】

N6161N

【作者名】

blue birds

【あらすじ】

願いと「願い」を巡る物語です。

あと、読んでくださる方は、縦書きの方が読みやすいです・・・

春

『桜花・開幕・春』

意味なんてなかった。あつたのは切望だけ。

日々努力し、手を伸ばし、あがいても、それにはいっこうに近づけない。

むしろ遠ざかっていくようにも感じた。

そして、それが叶うことはないだろう。

だってそれは、空っぽの願いでしかないのだから。

『桜花・第一章 桜の季節』

「他人に、「君は生まれてこの方、なにか成し遂げたことがあるか」と聞かれたとき、君たちはどう答える？」

高校の入学式直後のホームルームで、担任がなにやら自信満々に言い放った言葉だった。

そんなん言われてもと思う。

俺はついこの間、この常磐高校に（レベル的に中の上）に合格した。そしてついさきほどその入学式も終わり、今、初めてのホー

ムルームを受けている。

この高校に入学するまでは公立の中学校にいた。

その前は公立の小学校。その前は・・・ほいくえん？

まあ、そんなところで、多くの人間が歩みそうな道だ。部活もしていたが進学（又は進級）するたびに変わったし、どの部活でも県大会にすら行けなかった。

唯一頑張ったことといえば高校受験だろうか。微妙なランクだけど。

教師の説法は続く、

「これからの高校生活をどういうふうに過ごすかは君たち次第だ。ただ、君たちに分かっていて欲しいのは、これからの人生の第一の分岐点となるのがこの高校での過ごし方であるということであり、大学受験はもう3年をきって・・・」

!!!!

はっとするとホームルームが終わっていた。

希望に満ち溢れた若者たちにリアルという泥を塗りつける、あの担任の言葉を完全にシャットダウンしていたらしい。こういったものを無心の境地というのではなからうか。

周りを見渡す。

同類なんたら法則により、すでにグループが出来上がりつつある。ここで出方をしくじると後が痛い。なんとなく、『あいつはぶられてね?』みたいな空気になるからな。

とりあえず、自分もかつてからの友人らと合流するために席を立つ。

机の合間を抜けていく。その間にも馬鹿笑いが聞こえる。耳を打つそれはいつ聞いても飽きないものだ。

距離にして2〜3メートルほどの席で何やら盛り上がっている。

まあ、何の話かは見当がつくが。

たいした距離でもないのですぐに合流できた。

「ふう、で？」

問いかける。主語も述語も必要ない。俺たちにはこころがあるから。

「柴田さん」

「明里」

「柴田さん」

「・・・なん点？」

「80」

「プライスレス」

「90」

「確認だが出席番号は？」

「13!!!」

ハモってる！

「お前らなんで全員おなじだよ！」

同類なんたらはこんなところまで適用されるのか？しかも約一名、勘違いの果てに呼び名が名前になってるし。

「80はいい子ちゃんの点数だな川島。90はどう考えても顔こそ命という考えが前方に出ているぞ七夜。それと、いつまで伝説作るつもりだ江藤。頼むから向こう4ヶ月は大人しくしといてくれ。いきなり説教部屋はきつい」

いや、しかしあれは仕方がないか。

そう思っていると、江藤が意地の悪い笑みを浮かべて突っ込んできました。

「お前はドウなんだ、昇？そういうからには明里じゃないんだよね？」

なにやらイラつとする。だいたいドウってなんだよ。ルー大芝かよ。

「柴田さんだ、60」

言い方がぶっきらぼうになる。こう答えた場合、次にどういう返

事が帰ってくるか分かるくらいには友達だ。しかしあれは別格だと思う。生まれてはじめて見たよ。何であんなに美人で人がよさそうなんだ。

「明里かよ。しかも60で。何様だお前は。自分の顔を鏡で見てみ？ 軽く死にたくなるから。鏡ほどはつきり映らないから水の方がいいかもな。いや、もちろん泥水よ。その辺の川水だとお前の顔がそれなりに映るし、家庭用排水から来る泡がそこに流れてきて割れでもすれば儂さが5割り増しだから。」

はつきり言っただけ俺の顔は悪くない。少なくとも俺がいた中学では4人ほどから告られているし、どの娘も男子生徒に人気がある娘ばかりだった。しかし今回そこはどうでもいい。

問題なのは、予想をはるかに上回る江藤の毒舌だ。俺は中学校3年間こいつとつきあってきたが、いまだに底が見えない。いや、低すぎて常識ある身では理解できないのかもしれない。小学校からの付き合いあるやつもいるが、そいつら以上に江藤とは会話をしているはずだ。・・・そう言えば、なぜ俺はこいつとこんなにつるんでるんだ？ 良識がある身なら、速攻で絶縁するべきなのだが。

・・・ああそうだ、思い出した。こいつと自分の苗字が一緒だからだ。一字一句。そのせいで、仲間内では江藤といえば卓也。昇と言えば自分のことだとなっている。まあ、苗字が一緒だけでそこまでつるむことは普通ない。しかし、こいつと苗字が一緒というところが自分にとって災難なのか幸運なのか、こいつと自分を結び合わせたことは間違いがない。

そこまで考えたところで思考を打ち切り、江藤に向かって言わなければならぬことを言っただけ。

「お前は自分にそんなに自信があるのか？ あだ名はナルちゃんだな。これで決定だ。いや、もうなんだかんだで友情が壊れるのは早いというが、俺たちって結構持った方だよな。3年か。短かった気がするよ。あだ名なんて意味無いな今更。じゃあな。今からお前がこの高校合格発表当日にしでかしたことを校長にちくって来るから。」

失礼するよ。では」

おもむろに席を立つ俺。そんな俺に、

「まあ待て待て。江藤（笑）」と江藤が言いやがった。

バカの独白は続く。

「俺たちは一身体だろ？俺の不始末は俺とお前の不始末。お前の不始末も俺とお前の不始末。別に俺はこの高校を去ることに後悔はないよ。思い入れもまだないしな。ただ、ここで江藤が何かしらの理由で退学になるとその話は、それこそ全校生徒に翌朝にでも広まっていることだろう。だって入学式当日に退学だもんな。こんな武勇伝はそうないぞ。江藤が、江藤が、入学式当日に退学。理由は××。いや、俺は別にいいんだ。だってもうそんなうわさが広まるころにはここには居ないんだから。ただ、この高校に残った江藤がかわいそうだな。経験上、きちんとした認識が全校生徒に広まるまでどれくらいかかるだろう？1ヶ月？2ヶ月？ま、それだけあれば、おまえがはぶられてもいいやつになるには十分だな。人を呪わば穴二つだ。昔の人はいいこと言うな。俺の言いたいこと分かったなら、とりあえずすわっとけ？」

「・・・」

呪っているつもりは無い。正義を貫こうとしているだけだ。しかし・・・

「もういいじゃん昇。こいつもまだ見ぬ高校生活にちつとばかり少年に戻っているだけなんだよ。そこのガキと変わんないだって。小学生にマジ切れする高校生なんてみつともないだろう？」

川島が言うことは分かる。そうなのだ。目の前にいるのはその辺の小学生と同じガキだ。

しかし、そうならばこそ湧き上がってくる不安もある。何をしかすかわからないという一抹の不安が・・・。

「そろそろお開きだ。掃除の時間」

七夜の一言でただらとした空気がかき消える。なんかこいつには従わないといけないようなそんな気がするんだよな。理由はわか

らんが。

教室のあちこちで立ち上がる音が聞こえる。時刻は午後2時半。3時くらいには帰れるか。そう思いつつ、ロッカーまで歩いていて箒に手を伸ばす。

「おい、昇。お前雑巾しろよ。俺、箒するから。入学式当日に地べたはいずりたくない」

「・・・」

江藤のたわごとを黙殺。握った箒を振り回さないよう自分に言い聞かせて、俺は自分の持ち場に向かった。

「絵になるな」

「・・・」

「だなー」

「掃除しろ」

1人真面目なのがいるが・・・（言うまでもなく七夜）

まあ確かに、ホントに絵になっている。風になびく長い黒髪も、どこか遠くを見ているような細い目も、何もかもが良い。思わず黙り込んでしまうほどに。しかもいい感じに桜が舞い込んできて彼女の周りを舞っている。雰囲気で分かるのだが、教室中の視線がたぶんあそこに集まっている。どんな魔法だよこれ。

皆が皆、掃除そっちのけでボーッと柴田さんを眺める。

そんな中、突然フラフラと江藤が歩き出した。そのベクトルはどう考えても柴田さんに向いている。

「ちよっ！」と待ての一言が言えなかった。川島が思いっきりヘッドロックを掛けたからな。

春先の危ない人が目の前を歩いていく。フラフラと。そして自分の意識がそれに合わせるようにフラフラとしてきていることにも気づく。やばいと思った瞬間ぱっと開放された。げほげほと咳き込む。涙目で川島をにらんだが、それに対し、川島はにやりと笑い返してくるばかり。謝罪は無い。とにもかくにも後で殺すことにする。そ

れよりも今は??と江藤を見る。・・・もう声を掛けるには目立たずにはいられない距離にいやがる。さてどうするかと、迷っているうちに。

彼女にたどりついた江藤はやらかした。

「花見に行こう」

・・・ああ。そうだな。そんな季節だよ。確かに。だけどそれはないだろう。江藤、お前は、顔は良い。だけど、付き合う彼女が1ヶ月持たない理由がまだ分らないのか。必ず分かれるときの台詞が「もうついていけない」というのは偶然だとしても?

この度肝を抜く展開に、当事者の柴田さんは静かにしばらく考えた後、江藤を見つめ。

「そうだね。ちょうど良い時期だよね」と言って黙った。

ん? えゝゝゝ!

江藤は江藤で凄かったが、これはさらに度肝を抜かれる展開。なんかいけそうな雰囲気なんだけど。

クラス中が今やその二人に注目している。そのことが肌で感じられるほどに張り詰めた空気が教室を満たしている。静かな緊張をはらんだ空気の中で、柴田さんは再び口を開いた。

「帰りのショートホームルームで取り上げてみましょうか。さすがに夜遅くは無理でも、ピクニックみたいに休日の昼間を使うのなら佐倉先生も許可してくれるかもしれないし・・・。それにしても、このクラスについてもう色々と考えてくれているんだね。でも副委員長になったからってそんなに気を使う必要ないんじゃないのかな。わたし、委員長を軽い気持ちで引き受けちゃったから、江藤君に譲った方が良くもだね。」

あ? あ、あゝはいはい。そういえばそうだったな。あの二人そういえばそんな役職だった。確か、やたら元気のいい子が柴田さんを委員長に推薦して、それならば柴田さんの補佐役に自分がと、江藤が副委員長に自己推薦をかましたんだ。

しかし今のやり取りは、どう考えても話の根本をすりかえられて

いるような気がしないでもない。

「ん？ いやいやそうじゃなくてだな。柴田さん。花見に・・・」
以心伝心。柔道黒帯7段の川島とともに事態を鎮圧する。もちろん絞めは川島で締めは俺。

江藤は現在、川島のヘッドロックにかかって声を出せないでいる。ざまあみろだ。

そんな馬鹿を背に、彼女の前に立つ。さて、俺は俺で、やるべきことをやらなきゃな。

いつだって、こいつの尻拭いは俺の役目なのだ。

「えー初めまして。こいつの友人の昇です。迷惑掛けてすいません。こいつ、昔からムードメーカーで色々と首突っ込んで混ぜくるんです。いいほうに向かえばいいんだけど、たいていはまずい方に向かっちゃうんですよ。今回もクラスの中に壁があるのはまずいだろうとかなんとか言い出してこの騒ぎです。しかも絶妙に口下手なんです。誤解されることもしばしば。本当に迷惑掛けます。」

なんか言い訳じみているというかなんというか、必死。ああ、江藤がまたやらかした。

江藤が・・・俺じゃないけど、江藤が。

一人必死な俺。

そんな俺に対し、柴田さんは微笑みながらこう言った。

「え？ 迷惑なんて掛けられてないよ。いい考えだと思う。学校によっては、みんなの親睦を深めるために入学してすぐに学年全体で旅行に行くとか、レクレーションするとかあるし。うちの学校そういうのないから、ちょうど良いと思うよ。」

女神がいた。目の前に。別にそれは容姿のことじゃない。近くで見ると、より美人であることは否定しないが、それはそれだ。

じゃあ、どのへんが女神か。

まず、江藤の愚行を正当化してくれたこと。

本心かどうか分からないけど、クラスのことをきちんと考えてくれていること。

「それじゃあ、さっさと掃除を片付けましょう。いつまでやってても仕方ないし、詰まんないしね。」

仁を備えた女神???もとい柴田さんは、俺たち三人組にそう言い残すと、さっさと掃除に戻って行った。

少し素っ気ない感じもするが、まあ、当然か。俺と話したところで彼女が得るものは何も無い。

俺的には礼の一つでも言いたかったが、とりあえずはいったん身を引くことにする。だいたい、礼をこの場で伝えるのは流れ的にもおかしいし、それに、そんなものはこれからいくらでも言えるのだと、そう思ったから。

もう放課後だ。といっても、時刻が4時を回ったぐらいなので全然そんな気がしない。

しかし、本来なら3時くらいには帰れたことを考えると、やっぱり遅いほうかとも思える。

江頭発案のピクニックについて放課後のホームルームで話し合っていたためにこんな時間になったのが・・・いや、それだけじゃないか。

馬鹿の個人的なわがままのせいでもあったつけ。

「にしてもピクニックで明日か。急だよな」川島の無責任な一言に江藤が切れた。

「てめえらがしゃしゃり出てくるからだろうが!そんなにいやなら来るな!てかお前ら分かってるよな!明日お前らがすべきこと!ま

ずはお前だ川島!

話を振られた川島がけだるそうに答える。

「クラスを半分にしてバレー大会をしようと提案する」

「よしよく言った。」バカと目が合う。

「お前は昇!」

「得点係には誰になるかという話をふる。」

「そうだ。パンプキンヘッド!で、お前は七夜!」

「委員長と副委員長をそれぞれのチームの得点係に推薦する。」

「そうだ！むっつり！それでいい。明日という日において、貴様らにはそれ以上の役目はない。」

バカは笑う。

やつが言うには、話せば自分の良さが確実に柴田さんに伝わるそうだ。しかしそれにはきっかけが要る。しかもなるべく二人つきりがいいらしい。そこでやつが提案したのがバレーの得点係（審判込み）に柴田さんと江藤の二人がつくというもの。ホントにこいつは馬鹿だ。バレーは何人でやるスポーツと思ってるんだろうな（クラスメートは全部で28人）。

「お前らの望みはなんだ！」

調子に乗ったバカは更なる忠誠を求める。

「友の幸せです」（×3）

心のこもっていない言葉が大気を振るわせる。

「そうだ！そして明日幸せになるのは誰だ？」うざくなってきたが、仕方がない。

「江藤です。」（×3）

自分の喉から別人の声が出てきた。ちょっと怖い。

「あははは！そうだ！そして……………」

そのあとやつの人生設計に話が突入したため、意識がとんだ。

「あー疲れた。」

思わずもらしてしまう。時間は現在午後10時。今日起こったことに思いをめぐらせる。ほんとに色々あった。まずは、江藤が……………して。次に江藤が……………して。そしてまた江藤が……………はあ、江藤のことばかりだ。

もうちょっとなんかあってもいいのと思う。でも、ま、楽しかったしな。

そうだ。そして明日もそんな風にしてバカ騒ぎするんだ。これま

でのように、常のごとく、何も変わらない。ただただ続いていく。
昨日から明日へ。明日からその明日へ。
電気を消す。少し早いがまあいいだろう。明日もまたバカ騒ぎする
んだしな。そう思って、俺は眠りについた。

『 六花・開幕・春 』

?
幸せだった日々に思いをはせる。

?
幸せになれるかもしれない未来に思いをはせる。

?
二つの幸せは決して自分を裏切らない。

?
完璧な世界。

?
幸せのみで満たされた幸福な世界。

?
でも幸せがある以上、その対極に位置する世界も当然ある。

?
だから今がそうなのだろう。どれほどつらく悲しくても、今がある
から私は幸せでいられる。

?
?
今日も私は大丈夫。

?
?
?
?
?
?
?

？
？
『六花・第一章 桜の風景』

「秒速5センチメートルって見た？」

優花の弾んだ声が聞こえる。今日は常盤高校の入学式。そしてこれは、登校途中の楽しい会話。

もう中学校から飽きるほど繰り返している何気ない親友とのやり取りも、高校生になったからといって変わってしまうことはないのだ。

こうして会話している間に、4月のやさしい風が吹く。

それと同時に舞い上がる桜の花びら。

また同じ季節がやってきたのだと、つくづく思う。

「めっちゃくちゃ切ないんだよその映画。ん？アニメって言った方がいいのかな？うーん、どっちでもいいか。あれは必見の価値ありだよ。泣けるとかじゃないんだよ。なんかこう、胸キュン？」

思わず笑ってしまう。

何気ない会話。昨日の続き。

「そうそう。それで知ったんだけど、秒速5センチメートルなんて。桜の散るスピード。ほんとかな？それよりは速いっぽくない？」

優花に言われて改めて桜を見つめる。

・・・そう言われると確かに、秒速5センチメートルより速い気がする。

「でさ、三話でひとつの物語なんだけど。その中でも第一話の桜花抄がいいの。桜の花びらと雪をかけてるところがロマンチックで・・・。」

雪か。雪は良い。なんとなしに聞きたくなった。

「ねえ、雪が落ちる速度も秒速5センチメートルなの？」

しばしの沈黙。やがておおきなため息とともに優花は言った。

「ねえ明里。仮にもあんたも私も女なわけよ。同じ生き物。いや、外見は確かに富士山とエベレストくらい違うけど。でも世界一と日本一だから結構いい勝負だよね。・・・違う違う！私が言いたいことはそうじゃなくて！もうちょつと言い方があるでしょう、言い方が。雪は降るもんでしょ。落ちるもんじゃ決してない」

そうかなと思う。どっちも大して変わらないんじゃないだろうか。

「聞いてんのかコラ」

こずかれる。その間にも桜は散る。学校までもう少し。

「ほら急ごう。遅れるよ」

話を無理やり変える。この流れはよくない。少し小走りになる。

「遅れるか！あと40分あって、100メートルもいけないなら桜より遅いわ！」

計算してみる。ホントだ。少し遅い。ホントに、いつもはオチャラケているのに、こんなところでの頭の回転は速いんだから。思わず笑ってしまう。それに気づいた優花が怒る。

今日もまた、昨日の続きが始まる。

優花と自分は同じクラスだった。先ほどホームルームが終わったとこだ。今は掃除時間。といっても、今自分が掃除している、今日少し使っただけの教室なんて、そんなに汚れていないんだけど。にしても優花怒ってたな。

「なんなのあの担任、ありえないでしょ。何が成し遂げるうんぬんかんぬんよ。なめてんじやない！毎日成し遂げてるよ！くせ毛を朝の限られた時間でなだめるのにどれだけの労力がかかってるか。あの人も女ならわかっててもよさそうなのに！」

なんか違うと思ったが黙っていた。私も優花も、自分で言うのもなんけど人を見る目はある。佐倉先生はたぶんホントの意味で良い先生だ。優花もそう感じていると思う。だから、さっきの愚痴はただの愚痴。意味なんてない。空っぽの。

怒っていた優花とは別の掃除場所になってしまっていた。優花は

下駄箱らしい。今は1人で教室を掃除している。やっぱり1人というのはつまらない。退屈な時間が過ぎる。

そんな退屈な掃除をしていると、開いた窓から風が吹き込んできた。それと一緒に花びらも。しばらく私の周りをしばらくふわふわと流れていたが、それもつかの間、せっかくはわいた床に落ちる。これは汚れたんだろうか。きれいになったんだろうか。優花ならなんていうんだろう。後で優花に聞いてみようと思いつつ、とりあえず窓を閉めた。

落ちた桜の花びらをちりとりに入れてみると、誰かが目の前に立った。ふと顔を上げると、先ほど副委員長に選ばれた男子が立っている。ただ・・・

目が危ない人だ。だって、その視線が生暖かすぎる。どう考えてもこういった人と関わりあってはいけない。そう思うのだがいかんせん入学式当日。対応を間違えると後々に響く・・・。

思わずため息が出そうになる。この人が何のために自分の前に立っているか見当がつかないほどバカではない。ただ、クラスなり学校なりの環境が変わった当日に、同姓の友達と仲良くなる前に異性と話すというのは経験上よくない。自分の容姿くらいは認識している。そのせいで得することもあるが、多くは逆だ。さてどうしたものか。たいがいの事には対応できる。ならばこそ、ここはいつもどおり相手の出方を待とう。

相手と目を合わせる。すぐに相手の口が開いた。

「花見に行こう」

「・・・」

少しきつい。なんだろう、非常識にもほどがある。そうは思っても、目はそらさない。それはよくないから。すぐにはうまい切り替えしがない。とりあえず・・・

「そうだね。ちょうど良い時期だよね」

どちらとも取れる言葉を投げかける。これで少しは時間が稼げる。

しかし、なぜ花見なのか皆目見当がつかない。しかも言葉足らずで、どう答えていいかわからない。やりにくいな。

思考をフル回転。要点を整理。回避すべきこと、それは、

？

同姓に、もてるということを認識させないこと。

異性に、気軽に声を掛けれる女だと思われたいこと。

？

これは絶対だ。なにがあってもはずせない。

さらに思考を回転させる。すでにこの状況で必須条件は揺らいでいると考えるべき。補足するアドバンテージが必要。それには・・・この状況に置かれていた人間が自分のみでないということにすること。

そうなったなら、答えはひとつだ。

口を開く。

「帰りのショートホームルームで取り上げてみましょうか。さすがに夜遅くは無理でも、ピクニックみたいに休日の昼間を使うのなら佐倉先生も許可してくれるかもしれないし・・・。それにしても、このクラスについても色々と考えているんだね。でも副委員長になったからってそんなに気を使う必要ないんじゃないのかな。わたし委員長を軽い気持ちで引き受けちゃったから、江藤君に譲った方が良くもだね。」

きちんと相手の名前を会話に入れる。これだけでも周りに与える印象は全然違う。

私たちのことを知らない人間は私たちが昔からの知り合いだと思っただろうし、私たちが友人でもなんでもないことを知る人からすれば、私が几帳面に映るだけだ。実際に中学時代から几帳面であり続けたのだし。私の友人彼の友人、双方が抱く印象に差異はない。後は時間がこの出来事を風化してくれるのを待つだけ。少し強引だが、この会話はそこまで不自然ではない・・・と思う。

相手の出方を待つ。どうにか察してほしい。相手も入学式当日から

変なうわさは立てられたくないはず。そう思っていたのに、

「ん？ いやいやそうじゃ・・・」

なんでよ！ 空気読もうよ！ どう考えてもその選択肢は一連の会話から除外されるでしょう！ 焦りが生まれる。すると、

「なくてだな。柴田さん。花見に・・・っん。」

別の男子が彼を羽交い絞めにした。

そして別の男子が目の前に立つ。確か、この人も江藤君？

すぐに彼は口を開いた。

「えー初めまして。こいつの友人の昇です。迷惑掛けてすいません。こいつ昔からムードメーカーで色々と首突っ込んで混ぜくるんです。いいほうに向かえばいいんだけど、たいていはまずい方に向かっちゃうんですよ。今回もクラスの中に壁があるのはまずいだろうとかなんとか言い出してこの騒ぎです。しかも絶妙に口下手なんで誤解されることもしばしば。本当に迷惑掛けます」

と彼は早口で言った。

なんとなくこの人はもう1人の江藤君のせいで苦労しているんじゃないかと思う。

なにやらフォローが適格だったし。それに・・・まあいいか。この話を終わらせる方が彼にとってもいいに違いない。

「え？ 迷惑なんて掛けられてないよ。いい考えだと思う。学校によっては、みんなの親睦を深めるために入学してすぐに学年全体で旅行に行くとか、レクレーションするとかあるし。うちの学校そういうのないから、ちょうど良いと思うよ。」

こう流れたならもう一安心だ。後ろで迷惑な江藤君の顔色が少しづつ赤黒くなってきてるし、この話を終わらせることはきっと彼のためにもなる。

「それじゃあ、さっさと掃除を片付けましょう！ いつまでやってても仕方がないし、つまらないしね。」

そういつてその場を離れる。まったく初日から災難だ。これから先のことを考えると頭が痛くなる。・・・違う。明日はきつと今日

よりましだ。そうでなければいけないんだから。

無性に優花に会いたくなる。早く帰ってこないかな、今は下駄箱だっけ？ そう思いながら、掃除が終わる残り5分間を机を運ぶことでつぶした。

？

今は優花との帰り道。話題はもちろん今日のこと。メインはお互いが離れていた時間、つまりは掃除時間のことになる。

「そんなうざいのが居るの？ んゝその手のやつは無自覚にしつこいからね。まあ、周りがしつかりしているようだし、大丈夫かと思いたいけど、油断は禁物だね。明日もたぶん来るだろうね。さて、どうしたもんか・・・」そういつて優花は目を細める。しかし、

「口元が笑ってるよ、優花。言いたくないけど、頭の中のスパコンがものすごい勢いで回転してるのが分かるよ。そこに私への配慮は1ビット分もないこともね」

ジト目になって友人を見る。よくないことになりそう。これはもう直感だ。そしてそれはいまさら外れることはない。あの表情は何度となく見ている。

「ねえ、その明里を助けてくれたほうの江藤君てさ。ちょっとかっこよくなかった？」

すごい笑顔で言う。ただ、あの笑顔の下では狼が大きな口をあけて、よだれをどぼどぼと流してそうだけど。

「んゝそうだね。確にかっこよかったかな」

素直な感想を言う。すると、

「な？ ちょっと明里！ だめだよ！ あの人はもう私のもんだから。明里はもう1人の江藤君にしときなさい！」

さっきまでぼろくそに言ってた人物を友人に勧めるとは信じられない暴挙だ。どう考えても性格の似ているもの同士でくつつくとしたら、迷惑な江藤君とくつつくのは優花のほうだ。

優花の自説は続く。

「明里は大人だからたいいていの人とは合わせられるって！ でも私は

だめ！分かるでしょう？いつも一緒に居るんだから。なんとなくだけど、あの江藤君はうまい具合に私を支えてくれそうな気がするんだ！」

確かにと思う。たぶん、優花とあの江藤君は相性がいいと思う。だってあの迷惑な江藤君が居る場所に、そのまますっぽりと優花が入ればいいのだから。

ふと優花を見る。ほんとに優花はかわいい。勉強はあまり熱心にする方ではないけど、ことさら恋愛に関しては、私では足元にも及ばないくらい努力している。本当に全力で今を駆け抜けているという感じだ。そう、私とはまったく正反対に。今を一生懸命生きている。だから私は・・・

「分かったよ。協力する。優花のお願いだもんね。そのかわり、優花がわたしのナイトになってよね。それで迷惑な方の江藤君から守って。今日私を守ってくれた方の江藤君を優花がもってっちゃうんだから」

そんな本人たちの意思を無視した話をする。

「そうこなくっちゃ。了解了解。重々承知。任せといて。あんまりおいたが過ぎるようなら迷惑人間なんか社会的に殺してやるから！」
・・・笑顔であっさりと言っていることではないと思う。

掃除時間の話の後、行きつけの公園でもう少し話をして、そして、私たちは別れた。それぞれの帰路につくために。

とぼとぼと1人で歩く。することもないので、もう一度今日を振り返る。

騒がしい一日だった。その中でもなんとなく印象に残っているのは迷惑でない江藤君のほうだ。何か引つかかる。なんだろう？顔だろうか？確にかっこいいが、それは決定的でないような気がする。なんだろう？

・・・しばらく考えても答えは出なかった。でも、「まあ、いいか」と思い、家の玄関をくぐる。どうせこんな時間なんてまだ

いくらでもあるんだしと考えながら。

？

？

？

？

？

？

？

？

？

？

『 六花・第二章 楽しいピクニック 』

？

「ねえ、明里。私思うんだけど、ここにメトウ君が居るからこんなことになっているんじゃないかな。だって、今日の天気予報のお姉さん自信満々に、傘いらないうでしょう（にっこり）って言ってたんだよ！それがどうよ、これ！いいよ、別に！雨が降ってもさ！降水率0%は雨が絶対に降らないということじゃない！ってことくらい私も理解してるから。だけどさ・・・これはおかしいでしょう！何で空が黄色いのよ！」

空を指差し、私をにらむ優花。

「黄砂が飛んできてるからじゃない？」

冷静に答える。

「なにそれ！黄砂？中学校で習ったやつ？砂でしょ？中国の！何でそれが日本の空を覆ってるのよ！」

「それは・・・」

「そういうことじゃない！誰も科学的解説なんて求めてない！それくらい分かるでしょう？私が求めているのは青い空と江藤君との楽しいひと時。なのに・・・くっそー。これもメトウのせいだ。この報いは必ず受けさせてやる！」

そういつて暗い笑みを浮かべる親友。はつきり言って、ただのやつあたりでしかない。

？

空を見上げる。雲がないのに曇っていて、遠くが見えない妙な空。

？

現地集合だった花見は、最初だけはうまくいった気がする。遅刻者がチラホラ出ただけで、クラスメイト一名を除いて、大体の時間には全員無事そろった。時間帯も昼間だったため、場所取りもらくちんだった。今回の企画者のあいさつ、佐倉先生のあいさつ、どちらもとどこおりなく行われ、さあ後はみんなで騒ぐだけとなったとき、彼は現れた。黄色い空をつれて。

後はもうてんやわんやの大騒ぎ。広げていたお弁当は砂まみれになり、服はざらざら。

傘なんて持つてる人はひとりも居らず、必死に近くの休憩所っぽい所（少し離れた場所に点在している小屋）にみんなして逃げ込んだのだ。そして今に至る。

「にしても、優花。メトウ君はひどいんじゃない？どう考えてもそのあだ名はないよ。」

迷惑な江藤君、略してメトウ君。

「はい？何言ってるのよ明里。メトウ君なんてまだ良いほうだって。ホントはもっとひどいあだ名をつけてやりたいんだけど、私ボキヤ貧だから思いつかない。なんか無い？どぎついのは！県模試一番さん！」

そんなこといわれてもなーと思う。県模試ではひどいあだ名のつけ方が出なかったし、高校入試でも訊かれなかった。だから、多分生きていくうえで要らない技能なんじゃないだろうか。

黄色い空を見上げながらふと呟く。

「メトウ様」

「・・・」

お互い無言の時間が過ぎる。しかしその時間はそれほど長く続く

ことは無かった。

？

「そこのお嬢さん。いや、優花さんに話がある。」

沈黙はメトウ君によって破られた。いつの間にかメトウ君がとても真面目な顔をして私たちの目の前に立っている。なんか変なことになりそうだという気がするのだが、気のせいだと思いたい。でも、メトウ君の口元がにやけているのは気のせいではない。

「何よ。名前を気安く呼ばないで。そんな親しい間柄でもないでしよう？ 私、なれなれしい人嫌いな。だから向こう行って」

優花の一撃必殺がメトウ君の心をえぐる、ことは無かった。

「そうか。ツンか。そうか。そうだな。デレはそう簡単には拝めないか。見たい気もするが、いやかし・・・」

メトウ君がぶつぶつ言ってる。本当になんなんだろうこの人。頭がおかしいと思えない。保護者の江藤君を探してみる。すると、なにやら妙な顔つきでこちらを見ている江藤君を発見できた。妙な空気だ。なんかダメな気がする。このままでは・・・そう思っているうちに、メトウ君がメテオを唱えた。

「優花さん。あなたの気持ちはありがたいが、俺にはもうたった一人の女がいるんだ。だから君の気持ちにはこたえられない。すまない」

「っ」と苦渋の決断を強いられている、核のスイッチを前にした大統領の顔でメトウ君が宣った。

背筋が寒くなる。やばい。この人はやばい。そして、この状況も、ものすごくやばい。

優花を見る・・・。

無表情の優花がそこにいた。優花の拳が殺気を帯びる。

「メトウ君・・・。」

警告は届かなかった。私が言い終わる前に、優花の見事な正拳突きがメトウ君のみぞおちに打ち込まれたから。

メトウ君は優花の正拳により、「く」の字に折れて咳き込みながら、

「気がふれたか、このくそ女。振られたからといって、この仕打ち
は・・・」

メトウ君はさらに自分にメテオを唱える。

優花の拳が追加される。

「・・・」

ついにメトウ君は沈黙した。

？

？

「いやー。すいません」

保護者の江藤君が今更ながら出てきて謝った。謝るくらいなら止めてくれればいいのと思う。

「ちよっとこいつ春の陽気に当てられたっぽいんで、向こうに連れて行きますね。ホントにすいませんでした。では」

そういつて、メトウ君は連行されていった。その連れ去られ方も様になっていて、良くこんなことがあるのかなと思う。

「ねえ、明里」

優花が無表情のまま話しかけてくる。ちよっと怖い。

「私、メトウ君に好きだって言ったつけ？」

昨日から今までのことを頭の中で再生する。・・・。該当する項目はなし。

「言っていないんじゃない？」

とりあえず当たり前のことを答える。

「だよね。なのに、メトウ君はなぜに私を振るの？」

彼の思考をトレースする。・・・。解読不能。

「きっと深い事情があるんだよ」

優花には悪いけど、テキトウに答えておく。

「告白してない人に振られたのって初めてで、どう対処していいか
分かんなかったんだけど・・・あれでよかったのかな？」

さらに無表情の優花が聞いてくる。

状況分析を開始。思考をフル回転。・・・。。計測不能。

「あれで良かったと思うよ。」

とりあえず、適当に答えておいた。

？

お風呂上りに今日を振り返る。メトウ君討伐から数分後、それまでの黄砂が嘘のように引いて、気持ちのいい真つ青な空になった。ただどお弁当はざらざら、おまけに服もざらざらで、こんな状況じゃ花見続行は無理だろうとなり、花見は中止と相成った。

よくよく考えてみると、メトウ君が優花にあんなことを言った理由に心当たりが無くもない。ただ、それにしても江藤君は二人居るんだから、どう考えても先走りすぎだし、場所をわきまえないにも程がある。

そういえば、保護者の江藤君はどう考えているのだろう。

あの妙な顔つきを見る限り、優花と私の会話の内容を知っていると見て間違いはない。そしてメトウ君があんな風にされたってことは・・・。

これは急がなくちゃならない。事は緊急を要する。攻めるなら今だ。

それから、私は優花と30分ほど電話で明日以降どうするかということも含めた話をした。その後、その日はすぐに眠りについた。明日からはなんとなく楽しくなりそう。そうこれでいいのだ。これが、正しい今日の終わり方なのだから。

？
？
？
？
？
？
？
？
？
？

? ?

桜花・第二章 始まり

「あの野郎」。

現在、俺、川島、七夜、江藤の4人で弁当をつつきながらダベつ

ている。中学じゃ給食なんてものがあつたから、昼食が弁当になることなんてほとんどなかった。

なんかこういうことをしていると、高校生になったんだと実感がわく。が、江藤の恨みがましい声が隣から上がるのは、中学時代も高校生になった今も、全く変わっていない。

ちよつとからかつてみる。

「どうしたメトウ？」と俺。

「メトウ君うるさい。」と川島。

「メ・・・江藤うるさい。」と七夜。

「お前ら！雁首そろえて役立たずだったくせに何を！く、しかし！今は役立たずのお前らより腹立たしいものがある。・・・っく。」

あの女く。あくく。」

やらかした江藤が悶えている。それを見てるとイライラする反面なぜかひどく愉快になる。

一昨日に開かれた花見は予想外の黄砂によりめっちゃくちゃにされた。ただ、それだけならまだ良かったのだ。しかし、目の前でもだえている江藤がさらに場を混乱させた。

何があつたのかという・・・あまり思い出したくない。

あの日、黄砂によって避難を余儀なくされていた俺たちは、いつものことなのだが、4人で固まってダベッていた。暇だ暇だとうめき声を上げる俺たち。

普通に考えて、他の連中に話しかけるという手もあるのだが、なんかそういう気分にもなれない状況だった。（黄砂って、なんかやる気を吸い取るんだよ。By 江藤）

そんなとき、俺たちの悪友の一人である木島から、「同じクラスの榎本優花が江藤に惚れている」という情報が俺たち4人にもたらされた。

知らせを受けた江藤のテンションは一気にマックスへ。

そしてこいつはそのテンションのまま、意気揚々と榎本さん本人

の目の前に行き、思いつき振った。

確かに、こいつが柴田さんにほれている以上、当然の選択だ。だが、いくらなんでも場所が場所だ。俺はとりあえず、「何もすな」と、忠告したのだが、柴田さんに自分がもてることをアピールしたいこの馬鹿は、

「あえてこの状況で行くことに意味があるんだよ！だって考えてみ？昨日の一連の会話から俺が誰に惚れてるのか犯人も分かってるだろう？（犯人はスルー）だからここでそれなりに可愛い榎本を目の前で振ることで俺のもて度をアピール。そうするとこんなふう

になる。こんなに可愛い榎本を振るなんて、よっぽどこの人もてるんだわ。↓この人を連れて歩いてたら自慢できるわ。↓そういうばこの人昨日なんとなくだけど私にいい感じだったかも。↓いっそ告白してみようかしら。↓でも、節操のない女だと思われたらどうしよう。↓・・・」

延々と続く江藤の必死の説得にいつものごとく意識が飛んでいた俺はこいつを止められなかった。残った二人は基本的に面白いことが大好きなので江藤を煽った。

止めるやつも居ない、それどころか応援してくれる人しか居ない。この状況下でこの馬鹿がやらかさないはずもない。

気がついたときにはすでに、バカは手の届かないところに居た。途中、柴田さんからSOSを受けた気がしたが、実際江藤が言うように、榎本さんが江藤にほれている可能性も無いと言い切れない状況だった。どうしたもんかと事態の推移を見守っていると、すさまじい拳が江藤に炸裂。悶絶する江藤を無表情に見下ろす榎本さん。あ、これは早々に回収した方がいいぞと判断。すぐに行動に移すも、やつを保護する前に榎本さんは江藤に止めを刺した。

俺達は屍と化した江藤を回収、昨日に引き続き言い訳をし、その場から逃げ出した。江藤気絶直後に黄砂が止み、天候は回復したが、花見は中止。今回のことを弁解する暇も当然無く、この噂は学校が始まると同時にいつも通り学校中に広まった。

いわく、一年の江藤は節操がないらしい。いわく、一年の江藤君は勘違いの果てに告つてもいない人を振つたらしい。いわく……。

後はいつも通り噂に尾ひれがついて、その噂を総合すると、

「どう考えても江藤君はシャバの空気を吸ってはいけない人らしいよ。」

とめでたく相成った。

しかし、この馬鹿は今回のことで榎本さんを敵と見なしはしたが、落ち込んでなど居ない。いや、落ち込んでいるのだがその原因は別にある。

というのも、本人曰く、

「いやーでも、一番シヨックなのは俺の苗字すら明里が覚えてなかったということだよ。メトウくんってなんだよ。どんな字当てるんだよ。……以下略」

メトウ君発言に関してはなんとなく想像できるが黙っておく。にしても……、榎本さんの拳はすごかった。適格に江藤のみぞおちに拳をぶち込み、それを無表情に見下ろすその様はどこぞの殺し屋みたいだった。

「いやー、あれはお前が悪いよ江藤。あんな場所であんなことするなんて、友人としてはお前の存在を消してなかったことにしたいくらいだ。」

と煽っていたはずの川島が苦言を呈す。

「ここで裏切るか、川島！昨日はあんなに行け行けと背中を押したくせに！元はといえば全面的にあのくそ女が悪いんだよ！おい、昇調子に乗るな！俺は試合には負けたが勝負には勝ったんだからな！」ここでわざわざ、「いや、お前は勝負すらして無かったよ。」とは言わない。何しろ今回は少し機嫌がいい。

今回の事件は俺にとってかなりのデメリットをもたらしたが、珍しくメリットも残してくれたのだ。だから江藤の絡みも軽く返せる。

「そうだな。確かにお前は勝負に勝ったよ。そして俺はそれを素直に喜ぶたい。だってそのおかげで俺にとって割りと役に立つ情報を

お前は残してくれたんだからな。」
？

そもそも、木島がもたらした情報はえらく断片的なものだった。

「私が求めているのは青い空と江藤君との楽しいひと時。」と榎本さんが言っている。いきなりモテモテだな、江藤ご両人？」

ここで普通の人なら、聞き間違いかもとか、木島が言うように江藤は二人居るんだとか考えるのだが、このバカは、

「おいおい、ひがむなよ、ノボルン♪。いったいどれだけ俺たちは付き合ってるんだ？お前は昇、俺は江藤、世界の常識だろう？今更確認させるなよ♪。」

と当然というように言い放ちやがった。

ホントにこのときは江藤の将来が心配になった。こいつにとっての世界は俺たちしか居ないのかと。

その後こいつはぼこぼこにされ、戻ってきた。それはつまるところ・・・

「榎本さんか、かなりいいな。」

なんとなしにつぶやいてしまう。そう、こいつがぼこられたということは、木島の情報に誤りが無いなら、榎本さんは俺に気があるということになる。

「はん、この浮気もんが。数日前には明里にホの字だったくせに、今はこれか。お前はあれか？なんだ？えーと、そうだ、お前はへたれだ！」

ボキヤ貧を見るのがこんなにつらく、そしていたたまれないと知ることができたのは貴重な体験だと思う。

「黙れ。確かにきれいなのは柴田さんだが、それと付き合いたいという女性は必ずしもイコールではないだろうが。俺は、物静かなタイプよりもああいふ活発なタイプが好みなんだ。」

中学校では俺があまりしゃべらないせいもあってか、告白してくる女子はすべておとなしめの子に限られていた。しかし榎本さんなら、

「優花さんかあ、向こうにその気があるのなら、付き合ってみてもいいかも。」

そう思ったことを口にしてしまった。瞬間空気が変わる。七夜が、川島が、江藤が、静かに微笑むと席を立った。なんか気味が悪い。呼び止めようとするも授業開始の鐘が鳴る。

かなり気になるが、まあ仕方ない。後で問いただせばいいか。時間はまだくさるほどあるんだしな。そう考えて、俺は次の授業の準備に取り掛かった。

？

？

？

『 六花・第三章 兆し 』

？

ピクニックから2日あけて今日は月曜日。時刻は午後5時16分。そのとき時を止める衝撃の着メロが放課後の教室に響いた。

『優花さんかあ、向こうにその気があるのなら、付き合ってみてもいいかも。』

「・・・。」絶句するクラスメイト。

『優花さんかあ、向こうにその気があるのなら、付き合ってみてもいいかも。』

みんなが黙ったせいで、余計はつきり聞こえる意味不明の着信メロディ。

「・・・。」そして、だれも身じろぎひとつできない。

『優花さんかあ、向こうにその気が・・・。』

「おい、七夜お前の着メロじゃないか？うるさいから切っとけよ。放課後まで勘違いした江藤昇の声を聞いていたくないからな。」

と携帯越しにメトウ君が彼の友人に注意した。メトウ君からの電話を受けた、えーっと、七夜君(?)は顔色一つ変えず、

「すまん。うっかりしてた。教室じゃマナモードが基本だよな。すまん。」

「ホントすいませんでした。」

要点を整理、

理解不能。

優花を見る。

真っ赤な顔をしてうつむいている。

次にまともな江藤君を見る。

こちらは遠いどこかを見つめたまま、心ここにあらずといった感じ。そうだね。まあ、普通そうなるよね。

「おい七夜、川島、今からこの教室じゃないどこかに行こうぜ。この教室じゃなけりやどこでもいい。なんかこれからここ、ラブ的展開になりそうだからな。ああ、昇お前はいいよ、来なくて。お前ラブファクターだからお前が来ると意味がない。」

がたがたと席を離れるメトウ君達。それに釣られるようにして、周りのみんなも席を立ちだす。当たり前だが、この教室に残ることはメトウ君でもない限り無理だと思う。もう一度優花を見る。

「・・・。」

目があった。何も言わないが大体こんなところだろう。

（おととい話し合った作戦は？あれはどうなるの？てか、いまどうなってるの？私はどうすればいいの？こんなとこに私をおいていつちゃうの？・・・略）

うん、多分だけどこんな感じだ。確かにおととい立てた作戦とはだいぶ違うけど、わたしの聞き間違いでなければ、江藤君も優花を良いとおもっているはず。ならここで、多々良を踏む必要はない。

「がんばって。大丈夫だよ。」

そういつて親友の背中を押して、私は教室を出た。

？

教室を出たところで、メトウ君と七夜君と、えーと、川島君（？）に会った。三人とも廊下に座り込んで、夕日を眺めている。そして、三人ともなんだかボーっとして心ここにあらずといった感じだ。

ホントになんなんだろうと思う。この三人のうち二人は明らかに共犯なのだが、あの撤収の手際のよさから見ても三人がグルであることは、なんとなく想像できる。だが、今のところそれはさして問題ではない。今問題なのは三人がなぜこんなことをしたのかということだ。今回はもとから私も優花も江藤君問題に関してはガンガン攻めていこうということではついていた。だからといって問題ないわけではないのだが、それほど深刻にならずにすんでいる。けど今後こんなことをされると明日以降、優花と江藤君の間がどうなるんであれ、必ず後々面倒なことになるのは必須だ。ここはひとつはつきりさせておくべきだと思う。だけど、

（ホントはまだ大人しくしとくべきなんだけどなー。）

と思うのが正直なところだ。それでも困るのは親友と自分だ。メトウ君は無理にしても、せめて残りの二人にははつきりと分かかってもらいたい。そう思って、彼らの前に立つ。

？

「あの、話があるんだけど。」

「なんだ、明里か。ちようど良かった。俺たちも話があったんだ。」

と答え、さっさと歩き出してしまった。

ひよっとしたら自分はここ何年間かの記憶を失ってしまっているのではないかと思ってしまう。それくらいメトウ君の「明里」は自然だった。記憶を整理する。

A grid of 20 columns of dots. The first column contains 21 dots, and the remaining 19 columns each contain 20 dots. A small circle is located to the left of the first column, between the 19th and 20th rows.

「スンマセン、柴田さん。あいつ馬鹿なんで許してやってください。でも、悪いやつじゃないんです。それは保障します。」

と川島くんが声を掛けてきてくれた。川島君はメトウ君を眺めながら続ける。

「柴田さんが言いたいことは、簡単に想像できます。江藤と榎本さんの一件ですよ。やりすぎだと思ってるんでしょう。正直俺らもどうかと思います。だから、それも含めて色々話したいんです。だから、少し時間とってもらいたいです。いいですか？」

こんな状況でなんだけど、よく見てみるとメトウ君の友人は背が高いひとばかりなんだとよく分かる。私も背が低いほうではない

のに。

1人でさっさと行ってしまうメトウ君を眺める。ホントになんなんだろうと思う。これまで15年生きて来て、こんなにもまぐるしく変わる日々があったのだろうか。いや、多分無かったと思う。昨日は今日に続き、今日は明日に続いていく。その退屈がとてもつらくて私は・・・。

？

今ではない遠くを見るようになったというのに。

？

今思うと、ここが分岐点だったんだと思う。結局この物語は花に始まって花に終わる物語だったのだ。淡いピンクの花と無色透明の雪の花。桜と六花の物語。二つの花をめぐる物語はここから静かに動き始める。

？

？

？

？

？

？

？

？

？

？

？

？

？

？

『桜花・第三章 混乱の黄昏』

？

神よ。俺は何か悪いことをしましたか？別にいいことをした覚え

はありません。ですがこんな罰を与えられるような悪事を働いた覚えもありません。だから私はあなたに聞きたい。さっきの着メロはなんだったのでしょうか。いや、分かってます。すべて分かってます。でもこれはあんまりです。

それと、久々にあの馬鹿からフルネームで呼ばれました。あれはすべての罪を私に着せるときの常套句です。神よ。私はあいつを殺すべきでしょうか。いや、あいつらを殺すべきでしょうか。神よ・・。

今どういう状況下というと、「優花さんかあ、向こうにその気があるのなら、付き合ってみてもいいかも」という俺の恥ずかしい独白をどういうつもりか知らんが七夜が着メロにしてい、それが響き渡った直後の教室に優花さんと二人取り残されているという状況。このとき七夜に電話していたのは、これまたなぜか分からないが同じ教室内に居る江藤だった。

まあ、単純に考えると嵌められたんだよね！あいつらに！あの馬鹿共に！

「あの」

目の前で声がした。よほど放心していたのか榎本さんが近づいていたことにすら気づいていなかった。やばい、何も考えられない。

「少しお話いいですか？」

いいも何も話すしかないだろう。ここで話もせず帰れば俺は後の三年間究極のヘタレとしてこの学校に君臨することになる。

「うあい、どうぞ」

意味不明の相槌がのどから出る。江藤め、この報いはいつか償ってもらうからな。そう思いながら、榎本さんに向き直る。顔を真っ赤にした榎本さんが目の前に居る。・・・。やっぱ何も言えない。俺が黙っていると榎本さんが口を開いた。

「えっと、自己紹介はもういいですよ。それよりも、江藤君も私も、今話さなきゃならないことがあると思うんです」

俺もそう思います。でも今は無理です。もう少し時間下さい。心

の準備ができてないんです。だから何か話題を。何か話を振って時間を稼がないと……。そうは言ってもやっぱり出てこないものは出てこない。どうすんだよ俺！

しばらく無言の時間が続く。

それでもどうしても口を開くことができない。なんでだよ。いつも江藤たちを放すときにこの口を使ってたはずなのに！何で俺はこんなにヘタレなんだ？どうして俺は……と自虐の世界に引きこもろうとした俺に顔を真っ赤にした榎本さんが「あの……」とさらに声をかけてきた。ああ、女の子にばっか頑張らせてる。

そんなどうしても気の利いた話題を振れないヘタレの俺の代わりに、榎本さんが今まさに二人にとってとても重要で、そして有意義な話題を振ってくれた。

「メトウ君、もとい、もう1人の江藤君に報復するべきだと思うんですけど、どう思います？」

「……。はい、俺もそう思います」

この後、俺たちは自分たちが付き合ううんぬんかんぬんの前に、どうメトウ（江藤）を血祭りにあげるかを話し合い。その後は、やつにお互いがどれほど迷惑を掛けられたかという話をし、そしてそんな話を小一時間したところで、

「で、今更ですけど、さっきの着メロの真意はいかに？」

と聞かれ、

「はい、なんとなくですけど、榎本さんのこといいなあと思ってます。付き合ってもらえると嬉しいですよ」

と答えた。

？

今思うとこのときがすべてのターニングポイントではなかったかと思う。結局ここからいろんな歯車がかみ合いだしたんだ。桜から始まり、雪で終わる物語が。雪の彼女はどうか知らないが、少なくとも俺という人間はこの物語が終わったところで劇的に変わったわけじゃない。結局俺にとってこの物語は結果から見れば「なんで

もない」物語だったんだと思う。でも、決して無意味じゃなかった。これはそんな物語だった。そして今この瞬間に、その「なんでもない」物語がゆっくりと動き出す。

ゆっくりと。

？

それは当事者であつた俺たちですら気づくこともできないほどの速度であつたけど、

？

だが確実に、

？

この物語は、

？

ゆっくりと動き出す。

？

ひとつの終わりと始まりに向けてゆっくりと、

？

動き出す。

夏

『六花・幕間・夏』

見たいのか。見たくないのか。自分でも分からない。

ただわかることは、見てしまえば後は必ず不幸になるしかないということだ。

それ以外の選択肢はない。

なら見なければいいのに。

見なければ不幸にはならない。

だけど、見たい。どうしてもその思いを捨て切れない。

永遠があればいいのに。

そうすれば、私はそれを躊躇無く見れるのに。

永遠なんて無いと分かっているから。

そんなもの幻だとわかっているから。

だから今日も夢を見る。

幸せな夢を、幸せな幻を。遠い幻を。

『 六花・第4章 楽しいピクニック2 』

「おい。こっちこっち！明里さん！さあ、こちらに！んで、その他はきびきび歩いて荷物運べ！おい、その馬鹿女！特にお前は俺らの3倍は働け。特に理由はないが」

一人遙か先に行くハイテンションのメトウ君が本日何度目かのメテオを唱えている。

「明里。やっぱ思うんだ。世界にはね、生きてはいけない人がいるの。でもね、それは決してその人のせいじゃないと思うんだ。うん、私も分かってるの。昇にも言われたんだ。あそこにいる変な生き物はそもそも生まれてきてはいけないものだったって。なのに生まれてきてしまったんだって。だからホントは生きてちゃいけないのに、生きてるから変に感じるんだって。でもそれは決してメトウ君が悪いわけじゃないんだって。メトウ君こそが世界の被害者なんだって。分かってるんだ。けどね？もうそろそろ良くない？生きてちゃいけないのに彼は15年と4ヶ月も生きたんだよ？十分じゃない？もうそろそろじゃない？私の堪忍袋の緒が切れるの。あとメトウ免罪符の有効期限が切れるの」

メトウ免罪符。これは優花と昇君が付き合いだしてからまだ間もない頃、メトウ君に発行された免罪符である。別名「優花の弱み」ともいう。

さる事件で優花はメトウ君にとんでもない借りを作ってしまった。それ以来優花はメトウ君を見るととき、無表情じゃなくて優しいお母さんの顔になる。優花が言うには、「いたずらっ子なわが子がじやれ付いてきていると考えると不思議と心が安らぐの」だそうだ。でも今は無表情。今夜あたりがメトウ君の山になると思う。メトウ

君の余命がいくらかというのは置いといても確かにメトウ君はやりすぎだと思う。

「優花。メトウ免罪符なんて気にしないでいいよ。大丈夫。考えてみて？ 優花を怒らせるとまず誰が怒る？ もちろん優花の次にだよ。愛しい愛しい昇君？ 違うよね？ じゃあメトウ君？ これも違うよね？ じゃあ誰？」

「……」

無言の優花。でもそのくりつとした目には活力が漲ってきている。どうしよう、今考えてる台詞を言うと、メトウ君は今夜を迎えることなくその命を儚く散らせそうなんだけど。

「正解はあなたの親友の私！ もしメトウ君があのときのことを今更引っ張ってきて優花を脅すようなら私が一言言ってあげるから。」もし、優花の例の件を昇君に言ったら一生あなたと口を利かないことをここに誓います」って。さあ、行って来ていいよ。優花。よく今まで頑張ったね！ 昇君と私たちはあっちの富士山っぽい山を見ながらお弁当にしているから。ちゃっちゃと用事を済ませてきてね？」

でもまあいいかと思い、そう言って優花の背中をそっと押す。「うん！」と頷き、優花は本当に嬉しそうに軽やかに駆け出す。

さてと、あと私がすべきことは……

「川島君。もうそろそろお昼にしようよ。優花とメトウ君抜きで。あ、そうそうあの山の形って富士山に似てない？ なんだかあっちの山を見ながらお弁当食べたくなっちゃった。よしそうしようよ！」

そう言ってシートとお弁当を広げ始める。

「おい昇。確かに俺も腹減ったわ。榎本さんが江藤呼びに行ってくれてるらしいからこの辺で飯にしようぜ」

いきなりすぎる展開。けどなんとなくこの展開が面白そうな（メトウ君がやられる）方向に進んでいるのを感じ取った川島君と七夜君が素直に協力してくれる。

昇君は急な展開に驚いた顔をして、かつメトウ君を呼びに駆けてゆく優花の嬉しそうな後姿を見て、

「は」

とひとつため息をついて腰を下ろし弁当を広げ始めた。

4人で仲良くお弁当を食べる。今日のお弁当は私と優花で朝から張り切って作ってきたものだ。これを作ってるときの優花は一生懸命で本当に可愛かった。私が男だったら絶対に優花と付き合ってたと思う。さわやかな風が吹き、夏というのに涼しげな風が頬をなでる。ホントにいい気持ち。目の前に広がる山も、見渡す限りの青々とした草原もわざわざペンションを借りてまで遠出した甲斐があるすばらしいものだ。

そしてそんな自然がいっぱいの風景にメトウ君の悲鳴が響き渡る。

「おい！ 貴様分かってるのか！ そんなことをすればあ！」

「あちよつと待て！ わるかっ！ おい！ たのむ！ があ！ あ！」

「おい！ 貴様分かってるのか！ そんなことをすればあ！」

「いや、マジであや！ まるっ！ ってい！」

「あちよつと待て！ わるかっ！ おい！ たのむ！ があ！ あ！」

悲惨なメトウ君の懺悔にさわやかじゃない山彦が混じる。

「山彦ってすげーな。こんなはつきりと聞こえるもんなんだ」

「いや、マジであや！ まるっ！ ってい！」

とお茶をすすりながら川島君。

自分でも不思議なんだけど、近くで川島君がしゃべっていてもなぜか情けないメトウ君の山彦の方が気になる。

「山彦はすごいが、江藤はゴミだな」

こっちはおにぎりをほおばりながら七夜君。

「・・・」

江藤君の親友（自他共に認める）であり、その親友を折檻している優花の恋人である昇君は無言。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・。」

場を静寂が満ちた。さっきまで悲鳴を上げていたメトウ君の悲鳴が止んだ。もっと続くかと思ったけど、けっこう短かったな。皆で静かにのんびりと優花を待つ。

「あ、ごめんごめん。何か江藤君ご飯要らないって。張りきって登りすぎちゃったからバテちゃったみたい。でも聞いてよ昇！さっすがあなたの親友ね！そんな状態にもかかわらず、この先私と昇の荷物持ってくれるんだって！ホントにいい親友を持ったね。私も鼻が高いよ！」

帰ってきた優花はそう言って元気に笑う。予想通りメトウ君は帰って来ない。

「・・・。」

無言の昇君。

「よっころしょ！さあ、私も食べよう！おなかペコペコだよ。まったく江藤君も食べればよかったのに。昇はちゃんと食べてね。朝言ったみたいに、頑張って明里と作ったんだから。私的にはそのブタさんウインナーがお勧め！」

元気な優花の声が山に響き渡る。だけど山彦にはならない。そうになると、さっきメトウ君はホントに一生懸命謝ってたんだってわかる。

「おいしいね！明里！」

「うん・・・。」

ごめんね優花。私もまだまだだ。都会育ちだからか山彦があんなにはつきりと聞こえるものだって知らなかった。まあ、山彦はあんまり関係なかったけど・・・。

だからね、昇君はばっちり聞いちゃってるよ。メトウ君の断末魔を。でも良かったね、優花。昇君はけっこう度量が大きい人みたい。さっきのやり取りを聞いて繭一つ動かさないんだから。だから大丈夫だよ。きつと！

衝撃の着メロ事件から早4ヶ月。今日という日にたどり着くまでいろんなことがあった。ホントにいろんなことが。

高校に入学した当時は絶対にこんなこと予想しなかっただろう。親友の優花が居るとはいえ、男友達と夏休みに1泊2日の避暑旅行。しかも親には内緒で（もちろん適当な言い訳はしたけど）。

今私たちが居るのは皆でお金を出し合って借りたペンションだ。かなりの高地に建てられているため、夏でも肌寒く感じる。

さっきやつとこさ山登りが終わり、着いたところ。ホントはわざわざ自分たちで登ってこなくても良かったんだけどお金ももったいないし、せつかくだからとピクニックがてら皆で登ってきたのだ。

ペンションの中は思った以上に広かった。高校生の私たちが6人入っても全然窮屈じゃない。しかも値段の割にはお風呂、台所、テレビ、冷蔵庫、そして大きいソファまで完備してある。今言った設備はすべて一階のもので、ここは二階もある。二階にはそれほど広くはないけど大きな両開きの天涯窓がひとつ有り、夜はそこから星を満喫することができる。

「えーと、女子が二階ね。男子が一階。分かっていると思うけど、床に就いてからの両階の移動は禁止。誰に言っているのか分かっているな？ 江藤？」

二階で換気のために窓を開けていると下から川島君の声が聞こえてきた。それに元気（？）に答えるのはメトウ君。

「はあはあ……。何言ってるんだよ川島。そんなこと言われなくても分かっているって……。ちょっとは俺を信用しろよ……。はあはあ……。まったくお前とも付き合い……。っ長いのに俺は悲しいよ……。俺にだって理性はある。大丈夫だ……。まかせろ……。」

たぶんこういった状況で男子が女子の部屋（階？）に乱入しないのは常識であって、理性で抑えなきゃいけないイベントじゃないと思う。メトウ君は理性を導入しないと私たちの寢床に乱入してくる

らしい。まあ、そうになったら優花の王子様が黙ってなさそうだけど。「おい昇。食料品とかどうする。思った以上に冷蔵庫が小さくて入らない。野菜類は表に出してても大丈夫だろうから肉とかその辺から入れとくぞ」

冷蔵庫に食料品を詰め込んでいた七夜君が外の昇君に話しかけている。あいも変わらず七夜君は会話が平坦すぎて質問しているのかどうなのかが分かりづらい。しかも声も小さいし。

「ああ、それでいいよ！こんだけ涼しいから大概大丈夫だと思う！あ、それよりも川島！布団とか人数分あるか確認してくれ！足りないなら管理人にもらい行かないとな！寒くて布団なしじゃ、多分寝れないぞ！」

それでも玄関でバーベキューセットの確認をしていた昇君は普通に返事を返してる。この辺の連帯感女子には珍しいものだ。野球で言うところの女房役というものだろうか。

「ねえ、明里？やっぱ昇は頼りになるわ。というより、メトウ君以外の男連中は頼りになるわ。下を見てみて見なよ明里。昇も川島君も七夜君も、皆何かしら仕事してるのにメトウ君だけ横になって何もしてない。ホントにダメだね、彼は。皆に悪いと思わないのかな？」

優花が本当に遺憾ですなという顔つきで話しかけてきた。でも口元はにやついている。優花はホントにいつ見ても分かりやすい。

「私が思うにね、優花。メトウ君が寝転んでるのは起き上がれないからだよ。だって良く考えたらあそこの2日分の飲料水は全部メトウ君が持ってたよね。そしてそれだけじゃなくて、今七夜君が詰めてる食料品のほとんどはメトウ君が持ってなかったっけ？最初は優花と昇君の分だけって話だったけどね。いつからだっけ、メトウ君が私と七夜君以外の全員の荷物をもって登山し始めたのは。」

「うん？お弁当食べ終わったあたりくらいからじゃない？よく覚えてないよ。でもメトウ君が運んだのはせいぜい距離にして1キロくらいじゃない？あそこからこってそんなに離れてないよね？そん

ぐらいの距離でばててちゃ話になんないよ。やっぱりメトウ君はダメだなー。」

と優花は嗤う。時々優花はダーク優花になるけどその辺昇君はどう考えてるんだろう。今度こっそり聞いてみようかな。

「優花！ごめんけど柴田さんと寝具の確認に行ってきたくれ。場所はわかるだろう？頼むよ！」

下から昇君の声が聞こえる。わざわざ山のふもとから登山したために時刻はすでに夕方の4時だ。確かにそういったものを確認しての方がいいかもしれない。ここに予め用意されている寝具は4人分で（さつき川島君と昇君が話してた）、残りふたり分が足りてない。「いいよー！こっちも荷物の整理と換気が終わったとこだし！足りない2人分を取りに行けばいいんでしょう？他になんか取ってくるものある？」

「いや、いまんとこそれだけでいいよ！てか、二人で運べるか？かなりかさばるから、持てなかったら持てないで無理すんなよー！」

ここだけ聞くと彼女思いの良い彼氏に聞こえる。だけど、昇君が言っていることをメトウ君が言うようになる。

「いやいや馬鹿女。状況考えろよ。かさばる布団もって来るんだったら他のもの持てるわけないだろ。だいたい俺が頼んだのは確認であって運搬じゃねえよ。でだ、仮に持ってくるにしたって一回じゃ無理だから分けて運べよ？落としたらそれに寝るのはお前だ。それを理解した・・・」

メトウ君はまだ無意味に優花を挑発しそうだけど、この辺でやめとこう。昇君はこんなふうに言わないけどだいたい言いたいことは同じ。優花はどちらかというと尽くす方だから昇君にはなんでもしてあげたいんだと思う。でも、大概優花は空回りする。これは長年の経験から分かっていることだ。そして、短いながら4ヶ月お付き合っている昇君もそのことに気づき始めたらしい。ぱっと見ると優花が世話焼きに見えるけど、実際に世話を焼いてるのは昇君の方だ。最近では見慣れたものになったこの光景も未だに新鮮でほほえ

ましい。やっぱりこの二人お似合いだなと思う。

「うん、分かった！無理はしないよ！大丈夫だって！私に任せとけば！よし、じゃあ明里行こう。えっとこの鍵番号を見せなきゃ布団もらえないから鍵も持っていかなきゃね。それと・・・。」

優花はそういうと必要なものを準備し始めた。その動いて回るさまはさながらハムスターだ。なんかなごむよねー。っと、なんか他人事だった。わたしも速く準備しないとね。

「ふう、台車貸してもらえてよかったね。これ無かったら二人じゃとても運びきれなかったよ。」

静かな山間の風景にコトンコトンと台車が転がる音と優花の声が響く。

「ねえ、見れると思う？流星群。都会でも見れるくらいすごいのが来るって言ってたから、きつと見れるよね。まあ、天気しだいだけど。山の天気は変わりやすいって言うからなー。最悪、町にそのままいたら見れたのに！ってなるよね。まあでも、大丈夫でしょう。なんたって、晴れ女の私と晴れ男らしいメトウ君がいるんだから。」

そう言って優花が元気に笑いかけてくる。前回の花見ではメトウ君は砂を連れてきてたことを優花は忘れたんだろうか。確かに天気的には晴れだったけど。

先ほど優花が言っていた流星群。これの観測が今回の旅行のもうひとつの目的。何十年に一度の規模のものらしい。

獅子座流星群。それが今回地球にやってくる流れ星たちにつけられた名前だ。

当初、この星を6人で見ることに意外に特別なイベントは無かった。何も最初からこのような山の奥地まで来ようとしていたわけじゃない。最初にこの流れ星の観測地点として私たちが選んだ場所は、かつて花見にも使ったあの公園だった。だけど、そこある人が待ったをかけたんだ。なぜ公園ではダメなのか、なぜ山のキャンプ場ならいいのか、その理由は本人が熱く語ってくれたけど、本音は違うと

思う。

「そうだね。きっと見れるよ。そのためにも『遅延型でてる坊主・逆さ吊りメトウ君』も作ったんだしね。」

遅延型でてる坊主。これは優花が編み出した最も新しいタイプでてる坊主だ。優花が言うには既存のてる坊主が約束してくれる晴れはあくまでも日中に限られるらしい。しかし、今回重要なのはあくまでも夜。いくら従来からあるてる坊主を作ったところで夜にはその効果が切れてしまっているため意味を成さないというのだ。

そこで優花は考えた。どうすればてる坊主の効果を夜に持ち込めるかと。

色々考えぬいて七区八苦の末に優花が編み出したのが、『遅延型でてる坊主・逆さ吊りメトウ君』だ。別に名前がメトウ君であることに意味は無いらしい。このてる坊主が従来の汎用型でてる坊主と何が違うかというと、単に色が黒い。しかも真っ黒。見ていて気持ちのいいものではない。ちなみに作り方も従来のものとはほとんど同じ。

このてる坊主の作り方はとても簡単。まず、新聞紙を適度な大きさに丸めて置いておく。ここまでは普通のと一緒に。ただここからが違う。普通は白い木綿の布で、丸めた新聞紙を包んだあとに輪ゴムで止めて完成だが、遅延型でてる坊主の場合は、この作り方に、白い布を墨汁で真っ黒に染める工程を加えなければならぬ。

なぜ優花はこの白い布を墨汁で黒く染めたのか。なぜ黒く染めることでてる坊主の効果が夜に発揮されるのか。

その理屈は簡単だった。

「白いてる坊主は昼間を晴れにしてくれるでしょう？じゃあ夜を晴れにして欲しかったら白の反対の色の黒を使えばいいのよ！どうこのインスピレーション！もうこれは晴れるしかないわ。ちなみに私は遅延型も汎用型も両方作るつもりだから。その日は一日晴れる！なんてすごいんだろう私って。これ昇に話しあげたほうがいい

かな？意外と使える知識じゃない？」

もちろん止めておいたほうがいいんじゃないかな、と言って置いた。さすがの昇君もドン引きかもしれないし。

「そうだった。あの理論は完璧だから今夜は晴れしかないんだった。えへへー楽しみだね、明里。今夜はいっぱい楽しもうね！」

静かな山に優花と台車の音が響く。

流星群観測開始まであと4時間。

『桜花・幕間・夏』

その願いを叶えるにはどうすればいいか？

……。しばらく男は考えて言った。
それは難しいな。

男は神妙な顔をして続ける。

結構僕もいわゆる世界からはみ出したところに居るんだが、君の願いを叶えてやれそうにはないな。

魔法使いを名乗る男は続ける。

結局のところ君にはそもそも願いなんてものがないんだ。

いや、あるにはあるが、君の願いは、はっきり行って情動に近いものだ。君以外の者もそれは当然持っているし、大多数の者はそれを満たすために「願い」を持つ。

君の場合。願いが大きすぎて、それに見合う「願い」が見つからないんだよ。

まあしかし、大丈夫だろう。君の願いはいつか叶う。それはそういう類のものだ。

しかし、そのとき問題となるのは君だ。大きすぎる願いはえてして、物事を不透明にするからね。

もしその願いを叶えたいのなら、そうだね、しっかりと見続けることかな。

何をもって、もちろん君の願いさ。君の願い。その大きさを。君の願いに明確な形がない以上あとはもう君の願いを内包する他者の「願い」を当てにするしかない。

そうだな。確かに君のいうとおりだ。確かにそれでは君の願いが叶ったことにはならない。あくまで他者の大きな「願い」の成就、そのおこぼれをもらうようなものだからね。

ただ、それがいやだというのなら、話はかなり難しくなる。はつきり言って、叶う確率はかなり少なくなる。それでもいいのかな？

そうか。またそれも一興だろう。ならば、別の方法を教えよう・・・
といっても、やっぱり待つしかないんだがね。もうこうなってくる
と俗に言う運命とやらの掛けるしかないんだ。形がない以上君の願いが叶うことはない。他者の「願い」を当てにできなければ、君の願いを、それに見合う「願い」へと作り変える必要がある。これは誰しもが本能的に行う行為であるからその方法を聞かれても困るんだ。

君の願いは、君自身が現段階で「願い」に作り変えられていない以上、自らそれを行うことはこれから無理だろうと思う。だから、待つ

といいよ。君の願いに形を与えてくれる何かを。君の願いを「願い」に変えてくれるものを。いつになるか分からないがね。

『桜花・第4章 宴』

「よし、ここで一旦確認だ。おい馬鹿女！布団は足りてるのか？」

江藤がまた優花に喧嘩を吹っかけている。懲りないやつだな、こいつも。

「あ？さっき持ってきたの見てたでしょう。足りてるわよ布団は。足りてないのはあんたのお頭の方よ。」

優花もそんな言わなくても……。まあ、こいつのおつむが足りてないことは全面的に肯定するけど。

「この女……。まあいい。よし次はお前だ川島！バーベキューに使う野菜及び肉はスタンバってるか？それがないと俺は確実に今日飢え死にするぞ。」

そういえばこいつ昼飯食ってなかったな。代わりに優花からえらいもん食わされたみたいけど。

「準備万端だ。っていうか榎本さんのまねじゃねえけど、お前さっき台所に来て確認してたろ。ちなみに昇担当のバーベキュー用ドラム缶と網もあり、七夜担当の炭火もすでに真っ赤だ。そして後はお前が黙ればすぐにでも飯が食える。状況は理解したか？」

川島……。お前分かっててやってるだろ。こいつ仕切ってるの自分を明里さんに見せたいだけだよ。もう少し付き合ってやろうよ。

「どいつもこいつも……。まあいい。俺は心がスターオーシャンくらい広い。では始めるとしよう！川島！七夜！俺たちは明里さんに尽くす！昇はもちろんだが馬鹿女担当だ。おい貴様、俺たちが明里さんに焼いた肉を一切れでも食ってみろ。そのときはあのときのこと……」

なにやら江藤が言おうとしたがそれは明里さんに遮られた。

「私はこの場において誓いを立てます。もう一生……。」

さらに明里さんが言おうとしたのを江藤が遮る。

「もちろん冗談です明里さん。さあ、食べましょう食べましょう。

何がいいですか？やっぱカルビですよ。これ高いんですよ。多分。

」

そういつて肉を焼きだす江藤。何か必死だなお前。しかも優花がここにきて狼優花になってる。なんでだ？ここにきて優花のSつけ

がにじみ出てるのは？まじでわかんねえ。

そうこう考えてるうちに七夜に話しかけられる。

「おい彼氏。なにぼーっとしてんだ。彼女が腹へって仕方ないって顔してるぞ。多分このままだと江藤がやられる。そうなる前になんとかするんだ。それができるのはお前しかない。」

いったい人の彼女をなんだと思っでやがるんだ。まあ、確かにそうなんだけど。

「おい優花、適当に焼くぞ。どうせこんなの最初の内だけだろうから。でもなんか食いたいのがあれば言ってくれ。一応俺がお前担当だから。」

とりあえずそう声をかけておく。でもまあ江藤も適当だからいつまでこのルールが生きてるやら。

「うん？あはは、ありがとう昇。でもいいよ。私自分の分は自分で焼くし。お互い今日はかなり動いたからおなか減ってるでしょ。いちいちそんなみみっちいことし無くてもいいと思う。おいしさが半減しちゃうでしょ。」

そういつて優花が朗らかに笑いかけてくる。んー、普段からけっこう世話になってるからこんなときくらいと思うんだけどな。やっぱり頼りにならないかな俺。

優花と付き合いだしてはや4ヶ月。これだけ付き合い合うとお互いの立ち位置というのはなんとなく決まってくる。一言で言うところの……なんだろうわかんねえ。まあ一言で表すのは無理だが分かってはいるのだ。多分……。

優花はかなり世話好きだがいかんせん空回りすることが多い。いろんな場面場面で俺を助けてくれようとするが、大概うまい具合に話がこじれて、終わってみれば当初の話とかなりずれていたということも多々ある。最初のうちは俺もその辺の対応の仕方が分からなかったのであたふたしてたが、最近では対処の仕方もだんだんと身

についてきていい感じにサポートできるようになってきていると思う。うんだからこういう関係をなんと言うんだろう。・・・やっぱわかんねえ。

「おい、昇。その焼肉のたれ取ってくれ。黄金の方な。なんかお前の彼女が選んだやつマジで不味い。どういう味覚神経してんだよ。病院言った方がいいんじゃないかねえのお前。」

最初は俺を見て、途中から視線を優花に変えてメトウが言い放つ。あ、優花がお母さん優花（明里さん命名）になってる。こらえるんだ優花。今乱闘騒ぎは不味いことになる。火扱ってるから。

「昇。いきなりだが獅子座流星群どうする。皆で外で見るか。それとも二回为天窓から見るか。俺はどっちでもいいんだが。」

ほんとに突然に豚バラをほおばりばが七夜が聞いてくる。何かこいつのクールなイメージがあるからマジで焼肉は似合わない。

「うーん、どっちでもいいんじゃない？二階から見たいやつは二階で。この辺で見たいやつはこの辺でって、おいなんだよお前らのしらけた顔は。あーはいはい、そうですね。せっかく皆で来たのについて感じですよ。スイマセンスイマセン。デリカシー無くて。っていうわけで川島に任せる。はいどうぞ。」

無責任だけどどうすればいいか分からんからな。すまん川島後は頼んだ。

「丸投げかよ。ていうか俺もどっちでもいいからなー。というわけで江藤どうぞ。」

いや、おまえもかよ。

「はあ？俺？じゃあ俺と明里さんが二階でお前らが？？」

「えっと、私は昇君と同じでそれぞれが好きなほうで見ればいいと思う。どうせそんなに離れてないから、話そうと思えば話せるし。ね、そう思わない？優花！」

身の危険を感じた明里さんがえらく強引にまとめようとしている。さあどう出る優花。すべてはお前に託された。

全員の視線が優花に集中する。その視線の中、優花はニンジン

かじりながらこう答えた。

「メトウ君だけが二階で私たち5人が外。これが一番いいと思う。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

江藤ですら絶句。しかもなんだかそれでいい気がしてくる。

この後、もうその案でいいんじゃない？という雰囲気になったのだが、江藤が半泣きで抗議してきたので一番無難に“各人好きところで星を眺めること”と相成った。

天体観測開始まであと一時間。

『桜花と六花・開幕 奇妙な二人』

これは天体観測よりもすこしだけ未来の話。

だから、星を眺めようと山に登ったあの時の私と彼はまだ知るべくも無いそんな話。



彼らにであったのは秋の真っ赤に染まった公園。文化祭を明日に控えた、そんな浮き足立つ金曜日のことだった。

あれ？めずらしい。こんなことってあるんだ。やっぱり世界は広いね。ほらマイク、見てごらん。あれが重複存在だよ。しかもカップルっぽいし。こんなケースは初めてみるよ。彼らは根っこが同じだからあんまり惹かれあうことはないんだけどね。

文化祭準備の帰り道、たまたま帰りが二人っきりになった私と彼はいきなり意味不明なことを言いながら指差してくる女性とその子供？？？つぽくない少年の二人組に出会った。

おい、意味不明なこと言うな。それと指差すな。めっちゃ見られてるぞ。こっち来いって。ほら！

そういつて女性を引っ張っていく少年。それに抗議する保護者？？？には見えないけど、年齢的にはどう考えても保護者の女性。

あれ？いろいろ教えて欲しいつつたのはマイクだったよね？珍しいケースだからわざわざ教えてやったのに、何その態度！だいたいねええ、姉弟子の私に・・・

そう言い合いながら遠ざかっていく二人組み。なんだったんだろうな。私の知り合いじゃないけど・・・といわけで彼にも聞いてみる。

あの人たち知り合い？・・・じゃないね、その様子だと。でもまあ、優花がいなくて良かったね、昇君。今の会話を優花が聞いてたら確実に意義申し立てをしに、あの人たちのところに走って行ってたよ。彼女は私です！ってね。

夕暮れの公園で二人、わいわいぎゃあぎゃあ騒ぎながら遠ざかって行く二人を見送る。

彼らが完全に私たちの視界からなくなった後、彼が口を開いた。

いや、江藤がいたほうがメンドくさいことになってたと思う。でも、それはさておき、あの娘が言っていた「根っこが同じ」ってどういうことだろう。何か引かかるんだよね。

確かに、それは私も引かってることだ。でもなんだろう。いやな感じがする。それを見てはいけない気が・・・。

うん？あれ？昇君に浮気の傾向ありかな？そんなにあの女性が気になるの？優花に言っちゃおうかなー。昇君が文化祭前日に浮気の気配をかもしだしてましたって。

だからおちゃらけた。まだ時間はあるんだし。別に今しなくても、考えなくてもいいことだろうと思って。

いや、違う！なんでそうなるんだ！気になってるのはあの女性が言
ってた言葉であって、あのひと自身じゃない！ってなんだよその顔
は！マジで言うなよ！優花のSつけ最近まじで拍車かかってきてる
から！明日あたりに江藤と一緒に殺される！

メトウ君全然関係ないのに殺されちゃうんだ……。うーん、確か
に殺されそうだな。何でそう思うんだろう？

♪

こうしてこの話は一旦閉じられることになる。この話が再び紐解か
れるのは12月の24日。その日がどんな日になるのか。あの夏の
日の私たちも、この秋の日の私たちもまだ知らない。

『桜花と六花・第1章 天体観測』

「すごいよ昇！やっぱいよ、これ！まさにシューティングスター

って感じ！こんなの初めて見た。ちょっと明里！カメラカメラ！動画で！これは動画で！静止画じゃ意味無いよこの感動は！いやー遅延型でてる坊主がいい感じに効いたっぽい。明里見てる？え？見てるの？ダメだよ明里、見てちゃ！カメラ持ってこなきゃ！」

隣でめっちゃくちゃ言ってる恋人に説教した方がいいのか、空気を読んでよしといった方がいいのか微妙なラインだ。

「マジですげえな七夜。こんなの見たことあるかお前？」

川島が七夜に話しかける。

「いや、これは・・・ない。そりゃビデオなんかではあるけど生はない。それにしてもこれは・・・。」

七夜の言葉が続かない。確かにそうだ。これはホントにすごすぎる。

バーベキューを食い終わって、あらかた片付けがすんだところで俺たちは皆で花火をしていた。定番といっちゃ定番だったがこれが無いと夏だという気がしないのは何も江藤だけではない。楽しい時間はどんどん過ぎていき、それに伴ってどんどんと花火は消費されていった。残ったのは線香花火。

その最後に残った線香花火を皆でやっていたのだが、当然のように江藤がまず脱落した

「いや、この線香花火作ったやつセンスねーわ。どう考えてもつまんないだろ、これ。」

そうなにやら自分の忍耐力の無さにぶつぶつ言い訳していた江藤がまずうん？と言って、空を見上げたのこの天体観測の合図だったと思う。

ホントにこの流れ星の始まりは突然だった。始まりがいつだったのかすら今となってはもう分からない。目の前の星空に子供が落書きするみたいに光の線が引かれる。何本も何本も。時には数十本の光の線が夜空に瞬く。俺はただ今咄然と頭上の星空を見上げること

しかできない。



ずきりと胸が痛む。なんなんだろうこれ。

頭上を光の線が覆いつくす。優花は感動のあまり童心に返っちゃてるし、他の皆は空を走る星星の大群に心を奪われていて身動きひとつしない。確かに綺麗だ。こんなもの、生まれて始めて見た。綺麗な星空に気の合う仲間たち。幸せなはず・・・、なのになんなんだろうこの気持ちは。何でこんなにくる・・・。

「優花、私二階に行くね。」

それだけ言い残し、駆け出す。優花の「おい」という声も無視。だって声を出せば自分はきつと泣いてしまう。

やっとの思いで二階にたどり着いた。やばい、くるしい。なんでこんなに・・・。わけわかんない。なんで・・・。

だれも追いかけてこない。多分、優花が止めてくれてるんだと思う。変なところで感がいんだよね、優花は。

思い出すのはあのときの母の声。

（世界っていうのはね。いつも目まぐるしく移り変わっていくの。）

まだ知らなかった。心のどこかにそんなことないって思ってた。

（今日が終わればすぐに明日が来るの。だから毎日がてんてこ舞いよ。）

今日が明日に変わっても、明日が10年後に変わっても、引き継がれるものがあると思ってた。

（ねえ、明里。もし好きな人ができたら、お母さんに一番教えてね。お父さんはダメよ。多分明里にはまだ早いって、怒り出しちゃうはずだから。）

かつての母と交わした指きり。すぐにでも思い出せる。あのお母さんの顔も、そして今のお母さんの顔も。

（うん、秘密の約束だね。お母さん！）

懐かしい記憶。だけどその約束が果たされることは・・・

きつと無い。



明里さんが走り去ってしまった。この場にいる全員が混乱している。まったく心当たりが無いからな。

「・・・」

江藤ですら無言だ。こいつはいつもは馬鹿だが、肝心なところではそうじゃない。今あのペンションに入っていく資格がある人間は誰もいないことくらいこいつにも分かるらしい。そう、それは優花であっても例外ではない。いや、優花のように親しいものならなおさらかもしれない。

「へえ、あんたは、いの一番で追いかけてくと思ったんだけど・・・。ちよっとはお頭あるみたいね。感心感心。」

そういつて優花がおちゃらける。川島も七夜もそんな優花をじっと見つめている。

「あ？追いかけられるわけないだろ。そりゃあ、追いかけたいののは山々だが、明里に追いついたところで俺は何もできない。そんな俺が行ったって、自己満足にはなれこそすれ明里のためにはならない。

だろ？」

そう、いつもこいつには迷惑をかけられてきた。いつもだ、そしてこれからもそうだろう。だけど、本当にそれだけのやつなら親友になんか選ばない。俺がこいつを親友と呼ぶのはこいつがどこまでも優しいからだ。こいつは自分ではなく他人を思いやる。それはいつも肝心なところだ。いつもはわがままに振舞っていても、肝心なところでこいつは自分以外の大切な誰かを選ぶ。ならこいつは？こいつは最終的に何かを得ることができるのか？いつも肝心なところで一步身を引くこの馬鹿野郎は結局なにかを得ることができるのか？・・・

そう思った。だから自分がまずは隣に立とうと思った。こいつと対等な位置にいる数少ない人間として。馴れ合いなんかじゃない。ただそう、ただこいつが本当の意味で馬鹿をやらかそうとしたときに、こいつをぶん殴ってやれる人間として、こいつの隣に立ってやろうと思ったんだ。

そしてそれは今なんじゃないかと思う。

「おい、江藤。別にここで明里さんが戻ってくるのを待ってるってのもひとつの手だ。さいわい、俺らの頭の上にはうん十年に一度の光景が広がってるわけだしな。俺たちは別にいい。俺たちはな。でも明里さんはどうなんだ？お前だって見ただろう。あの顔。今にも泣きそうだったよな。たぶん、泣いてはいないにしても苦しんでると思う。そして、そうやって1人で苦しんでいる以上は多分1人じゃどうにもできないことだと思う。いや、できるかもしれない。でもきっと、今回のそれは・・・」

かつて誰かに言われた言葉。

（君の願いは、君自身が現段階で「願い」に作り変えていない以上、自らそれを行うことはこれからも無理だろうと思う。）

今となっては、遠すぎる記憶。いったい誰に言われたのかすら分からない。でもしっかりとその話の内容は覚えている。

（だから、待つといいよ。君の願いに形を与えてくれる何かを。君

の願いを「願い」に変えてくれるものを。いつになるか分からんがね。」

「1人じゃどうにもできないことなんじゃないかと思う。多分だけど。それに例え一人でどうにかできることだったとしても、お前なら関わっていいんじゃないかと思う。お前に何ができるかは別としてもだ。お前なら、少なくとも関わるくらいのは・・・俺たちとは別の形で、明里さんと向き合うくらいのはしてもいいと思う。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

全員無言。・・・。やばい、超恥ずかしい。誰かなんか言えよ。

さもなきや俺が行くぞ。明里さんとこに。何でこんな微妙な空気になってんだよ。くそ、だから俺は・・・。

恒例の無間地獄に放り込まれようとしていた俺を救ってくれたのは川島と七夜だった。

「いやいや、なんで江藤にフラグ立ってんの？俺らは？えらい勝手なこと言ってくれちゃってるけどさ・・・。おい七夜、お前も何とか言ってやれ。」

「江藤はゴミだと思う。が、まあそうだろうな。榎本さんは立ち位置的に柴田さんのところにはいけないだろうし、俺と川島は問題外だ。ならお前しかいないんじゃない？江藤よ。」

確かに、江藤フラグが立ってるっぽく言っちゃたけど・・・いいじゃんよ。別にこんくらいはさ。

「・・・。」

無言の江藤。だが分かる。この背筋がぞくぞくする雰囲気は毎回のことながら慣れるものではない。

「くっくっく・・・。」

エンジンが入ったらしい。しかもダメな方に。ああ、やらかすな、

こいつ。まあいいか。こんな日ぐらいやらかしたって。

「はあ……。」

優花もため息をつくだけで、何も言わない。つまりところこれはGOサインなわけだ。

「あははははは！」

馬鹿が笑う。でもそれは表面上だ。うまくやるだろう。多分だけど……。多分だけど……。



誰かがペンションに上がってきた。優花だろうな。多分、私ひとりじゃ戻りづらいだろうと思って迎えに来てくれたんだ。そう思ってもなんか気が重い。さすがに場をしらけさせすぎるには十分な威力だったからな。

足音が階段に到達した。うー。どうしよう、何か変な発作はおさまったけど、今更恥ずかしくなってきたよ。

「ごめんね。こんな特別な日にしらけさせちゃって。」

言い訳なんてみっともないと思って、出てきてしまう。自分の弱い部分も親友になら話してもいいと思うんだ。

「なんかさ、あんま星が綺麗でさ、その……。なんというか、この時間が終わっちゃうことを考えるとえらく悲しくなっちゃてさ。うんと、まさか泣くほどじゃないだろうと自分でも思うけど……。何か悲しくってね。」

足音が自分の背後で止まる。私の話の続きを待っていてくれるの分かる。

「終わっちゃうのがイヤなんだ。何かが。多分楽しい……。いや違うな。幸せな時間が。」

無言の優花。いつもの優花からは想像もできないくらいほどの静けさだけど、今はそれがあるがたい。

「だって、ずっと続いて欲しいと思うじゃない？ やっぱりそういう

時間ってさ。なのにさ、遅かれ早かれ終わっちゃうんだよね。だからそれがいやで、小学生かよと思うかもしれないけど・・・でも・・・。」

たどたどいいながら自分の心の内を必死で伝えようとしていたが、そこで後ろから優しく抱きしめられた。

「明里・・・。」

と言って優花じゃない誰かが私の名前を呼ぶ。

「・・・。」

何今の？明らかに優花の声じゃない。そして、優花はこんなにごつくない。というより色々と総合判断すると、これは優花というよりメトウ君？あれ？

違うよ明里。あはは、なにを馬鹿なことを。そんなことあるわけないじゃない。だってねえ？

壊れそうになる自尊心が希望をささやく。

優花が許すはずないよ。こんなの。優花を差し置いてメトウ君が来るなんて・・・それこそあり得・・・。

そこまで思考したところでとどめの一撃が私の心をえぐった。

「大丈夫だ。またつれてきてやる。これは何十年に一度の夜だ。だからまた連れてきてやる。そのときは、俺たちの子供も一緒だ。だからそんなに気を・・・。」

貞操の危機管理能力及び、自尊心保護能力に従い、優花を喚びます！

「助けて優花？？？！メトウ君がー！ー！ー！」

そこまで言ったところでペンションのドアがぶち破られる勢いで開け放たれる。

「川島君！とりあえず、メトウ君を落として！それと昇は明里を保護！七夜君は拘束具をお願い！その馬鹿を教育します！」

「チョイ待て川島。俺何もしてなっ！fかjs；fじゃあ」

あ、何かデジャブだ。この光景。前にも見た気がする。

「明里さん、どうぞ、ホットコーヒーです。怖かったです。もう」

う大丈夫です。さあ、行きましょう。外に。まだ星は流れてます。多分本格的になるのはこれからじゃないかな?」

「大丈夫だよ明里。これは想定範囲内だから。」

明らかに準備が良すぎる昇君と聞き捨てならないことを言う親友に連れられて、私は外に運び出される。

途中、ロープを持った七夜君とすれ違ったが、顔が嗤ってる。メトウ君・・・大丈夫かな?

そんな私の心配をよそに無情にもペンションの扉が閉められた。扉の向こうから聞こえてくるのはメトウ君の命乞いだけ。そして夜空には満天の星空。

なんだかとてもない馬鹿騒ぎをしてる気がして、思わず笑いだしてしまった。ホントにさっきは何であんなに悲しかったのか。もう分からなくなってる。

「ねえ、明里?」

優花が笑いながら話しかけてくる。

「うん?何?優花?」

私も笑顔で返す。

「メトウ君どうだった?ちょっとは役に立った?なんだかんだいって、明里のこと一番想ってくれてるのはあの馬鹿だと思うんだけど・・・明里先生的には何点?もち100点満点で!」

うーん考える。今のこの状況を作ってくれたことには感謝してるけど・・・、あれはないな。何よ子供って、意味わかんないし。

「29点かな。あと少しで赤点じゃなかったんだけどね。」

「くっくく。」

となりで昇君も笑ってる。親友が折檻受けてるのにそれでいいのかな?

「29か。明里にしては珍しく高得点だね。今までは無関心の点なし、ばっかだったのに。」

そう言って、優花が笑いかけてくる。やばい、これはいぢめられる。

「な、そんなことないって、大体こんな話自体今日が初めてでしよう！もう、変なこと言わないで！」

流れる星空の下で皆で騒ぐ。夜は更けて行き、やっと開放されたメトウ君と折檻していた川島君たちと合流する。メトウ君が怒る。優花が嗤う。ホントに楽しい時間が過ぎていく。

流れ星の下皆で騒ぎ続ける。

これが夏の思い出。私と、そして私たちだけでなく、あの場に出た全員にとっての大切な思い出。いつまで残るか分からないけど、とても大切な思い出。そして、少しずつ変わり始めた彼と私の物語の本当の意味での序章の物語。

夏・閉幕

秋

『六花・開幕・秋』

ねえ、明里？

（これは夢だ。でも、現実にあったこと。確かこれは、中学校のときのこと。）

「永遠」っていいものかな？なんかロマンチックな響きがある言葉じゃない？何でか知らないけど。

（夢の中の優花が不思議なことを聞いてくる。「永遠」が良いものかどうかなんて、考えなくても良いものだって分かる。当たり前じゃない。「永遠」なんて、望んだってそう簡単には手に入らないものなんだから。）

なんかさあ、私はそんな良いものには思えないんだよね。

（なんで？だって、「永遠」だよ？こんなに綺麗な言葉を私は他に知らない。こんな綺麗な言葉が良いものでないはずがないのに。）

うーん、なんでだろう？「永遠」って、変わらないって事だよ？ずっと、ずっと、どれほどの時間が経ってもさ。

（そう、そう、その通り。いつまでも変わらない。それこそが私の・・・）

でもさ、それって結局?????????????

（あれ？優花、何て言ってるの？聞こえないよ。もっとはっきりと言って。そんな小さな声じゃあ聞こえないよ。）

??
て全然いいことじゃないと思うんだよね。

（優花、聞こえないよ。もっとはっきりと・・・）

これは、私が常盤学園文化祭の前日に見た夢の話。ただの夢の話。少なくとも、このときの私にとっては。

『六花・第五章　文化祭初日・華やかな祭り』

「始まったね。」

優花がとなりであくび交じりに話しかけてくる。

「そうだね。始まったね。」

私もあくび交じりに同じ言葉を返す。

はつきり言って、私も優花もくたくたで、出来れば今すぐ保健室のベッドで横になりたいくらいだ。

そんなけだるい今日は、学園祭初日。

それは年に一度の祭りの日。

一年に二日しかない、大切な思い出作りの最初の日。

普通はうかれてはしゃいでまわるそんな日に、私も優花も、果てはクラスの全員が、最低のテンションだ。

というのも・・・

「メトウはいつかやらかすと思ってたよ。うん、いつかなんかやらかして、テレビに映って、そんでもって私たちがインタビューを受けるの。美人のアナウンサーにね。」あなた達は、江藤被告と同じ学校に通っていらしたんですね？」ってね・・・。」

私はボーッと空を見ていた。優香がなにやら話しかけているのは分かるが、今は何も考えられない。

「そしてそのときに言う言葉も私は用意してたのよ・・・」

空が青い。いい天気だ。そういえば、明日も晴れだっけ？

「私はいつか彼がこんなことをするんじゃないかと思ってました。だって、日ごろから彼は、その奇天烈な思考と行動で、周囲を混乱させてましたから。」って。・・・うん、用意してたんだよ、明里。いつかそういう日が来るって分かってたから。」

私は視線を空から移し、自分達の出し物の、「成れのはて」を見つめる。

「でもね、私の中ではあと10年先ぐらいの予定だったんだ・・・。だって、ねえ？まさかねえ？在学中にねえ？高校入った最初の年にさあ・・・」

私と優花の目の前にあるのは・・・「灰」。

もともとは「灰」ではなかったのだが、今では「灰」と呼ばれるものになっている。・・・いや、ちょっと違う。「灰」＋「消火器」からでた泡」だ。

「灰」だけじゃない・・・うん、泡もついている。

「「前夜祭」とかなんとか分けわかんないこと言って、夜の学校で花火大会するなんて馬鹿じゃない？あいつ。・・・ありえないよねえ？しかもピンポイントで、何でクラスの出し物にロケット花火打ち込むの？しかも、三発。いや、違うか。花火をテントにセットしうだって、そこにロケット花火を三発打ち込んだのか・・・あれ？どうだったけ？明里。なんで私たちのテント燃えたんだっけ？・・・まあ、いいか。とりあえず、あの馬鹿は普通退学だよな？ねえ？」

優花は頭がよく働いていないらしい。なんだか、今朝方聞かされた情報が変わなふうにチャンポンしていて、事実と微妙に違うことになっている。

・・・とにかく、私たちの絶望の原因は、文化祭の出し物に使うはずだったテントがメトウ君に燃やされ、今年度の文化祭参加は事実

上不可能となったことにある。

べつにメトウ君はわざとテントに火をつけたわけではない。まあ、わざと火をつけたのなら、それはそれで彼のこと心配しなきゃいけないだろうけど・・・。

どういった経緯でこんなことになったかというところ、このテント全焼事件は、彼が昨晚学校に忍び込み、仲間と一緒に花火をしようとしたことに端を発する。

忍び込んだ彼らは全員が全員、無駄に体格的にも恵まれていて、学校の塀を難なく乗り越え、グラウンドに忍びこむことに成功。

だいたい学校の警備なんて適当なものだから、塀さえ乗り越えられれば、誰にでも進入は可能だ。ただし、グラウンドくらいまでだけど。（さすがに校舎内はムリだと思う。）

そう、誰にでも出来ることなのだ。でも、誰もやらない。

なのに、学校に忍び込んだ彼らは、らくらく学校に忍び込めたそのことが、神様の祝福に思えたらしい・・・。（警備の人に見つからなかったことが、其の一例らしいのだが、あいにく、私たちの学校に常勤の警備員の人はいない。）

神に祝福されたと勘違いした彼らのテンションは一気にマックスへ。そしてその跳ね上がったテンションから、花火以外にも、何か記念になることをやらねばという発想が「柵から牡丹餅」方式で落ちてきたらしい。（この表現はあくまでもメトウ君のもので、わたしのものではない。）

そして彼らは缶けりを始めた。夜の学校でカンカンと缶をける音にしても、文化祭の用意で金槌かなんかを使っているのだと御近所さんに思わせれば、後の花火に差し障りは無いと考えたらしい。ちなみに、缶けり中は、逃げたり追いかけたりする間は絶対に無言というルールも決められていたみたいだ。この辺はなぜか知恵が回っている。（たぶん、大の高校生が無言で夜の学校のグラウンドを走り回る光景を見た人人がいれば、本気でどん引きしたことだと思う。）彼らは燃えに燃えて、缶けりが終わったのが明け方の5時。（彼らが

忍び込んだのが大体午後10時くらいだったから、通算7時間缶けりをしていたことになる。」

で、その頃になって彼らは当初の目的を思い出した。

しかし、彼らはもう十分に満足だったようで、花火をする気はほとんど抜けていたらしい。だから彼らは、線香花火くらいを最後にやって、熱かった夜の缶けりを締めくくろうとしたらしいのだ・・・。（まあ、たしかに、朝の5時から花火をする気にはならないと思う。）

で、友人3人と仲良く線香花火をはじめた。

涼しげな朝の線香花火はそつなく進んで行った。

そして彼らは熱かった夏の夜について語り合った。

線香花火なんかには目もくれずただひたすらに・・・。

もちろん、彼らが話しこんでいる間にも線香花火の火の玉は大きくなり、最終的に当然のように花火本体からはなれ、地面に落下していった。

そして、その落下地点に、未使用のロケット花火セットが置いてあったらしい。（もうこの時点で意味が分からない。はっきり言って、小学生でもそんな危ないことはないと思う。）

そして運悪く、落ちた線香花火によって、ロケット花火10本（20本セットの半分）に火がついた。

で、勢いよく飛び出した10本の内、3発がテントに命中。そして残りの7発が、他の花火セットに突っ込み、突っ込まれた花火はそれにより引火。（残りの花火セットがどこにあったかという点、テントの近く。）

引火した花火は、これまた運悪く消えることなく、命の火を燃え上がらせ、さらに其の火が別の花火に引火・・・あとはもうダルマ式に花火の火は膨れ上がり、最終的には火柱になった。で、テントが燃えた。

「・・・。」

「・・・。」

二人して秋の空を見上げる。

まったくもって、うまくいかない。ほんとにまったく。

「・・・ホントに昇も馬鹿だよ・・・なんで・・・」

優花の目は虚ろ。だってそうだろう。早朝の騒動で捕まったのはメトウ君だけではない。

「はじめての学園祭だったのに・・・バカ・・・。」

視線を文化祭のために臨時で用意された記事版に向ける。

そこにはこう書いてあった。

以下4名を2週間の定額に処す。

江藤 昇

江藤 卓也

川島 大輔

七夜 高貴

木島 剛

校長も慌ててたんだろう。漢字が間違ってる。よく使うのかな？定額って言葉・・・。

こうして最悪の文化祭がスタート。

そして同時に始まるのは私の物語。

ここにきて、ようやく、雪の物語が動き出す。

『桜花・開幕・秋』

ねえ、昇君の「願い」って何？

これは小学校時代に、同級生の女の子から聞かれたこと。

これに対して、別に取り立てて隠すようなことでもなかったので、素直に答えた。

うん？俺の願い？うーんと、幸せになることかな。

この時は自分の歪さに気づくことなく、当たり前のことのように答えた。

???? ええっと、それが昇君の「願い」なの？

戸惑っているような女の子。今の俺なら分かる。なぜ、この娘が戸惑っているのか。

うん。それが俺の願い。それがどうかした？

でも、このときは気づけなかった。自分の歪さに。

・・・ふん。そんなんだ。そんなことする人だったんだ、昇君って。・・・最低。

そう言って、女の子は去ってしまった。このときは、本当に気づけなかった。彼女が怒ってしまった理由に。でも、今なら分かる、その理由がなんなのか。でも・・・、

それが分かるようになるのは、もう少し先の話。少なくとも、この文化祭が終るそのときまで、俺がその理由に気づくことは無い。

「おい昇、文化祭行こうぜ！」

携帯越しに聞こえるバカの一言に俺は切れた。

「行けるか！このバカ！今日は停学くらった初日だよ！そんな日にこの文化祭に出張ってったら、停学で収まってるのが即退学に昇格だ！だいたい誰のせいで俺がいけなくなったと思ってるんだ！あ！？俺はもともと行けたんだよ、文化祭に！それで優花と思い出つくってたんだよ！」

受話器越しに聞こえる忍び笑い。

・・・こいつ、全く反省してない。

「いやいや、人のせいにするなよ、昇。考えてみ？よくよく考えてみ？例えばだが、漁師が罫を仕掛けてそこにウサギがかかったとして・・・悪いのは誰だ？」

これに俺は即答。

「お前だよ！漁師うんぬんのくだりはいらねえよ！しかも、漁師なのになんでウサギを捕ってんだよ！ウナギの間違いか？あ？」

ほんとに、こいつは馬鹿だ。信じられないほどに。

「まあそういきりたつなって。考えようによっては俺たちについてると思わないか？ていうか、あんだけのことやって停学ですんでんのは、やっぱり社会の闇のおかげなのかねえ。」

そう、こいつは俺から見たらただの馬鹿だ。しかし、学校の進路指導の先生方からするとそうではない。

「社会の闇かどうかは微妙だが、まあ、不公平な判断ではあるだろうな。」

学校に忍び込み、あげくの果てにぼや騒ぎ。

しかも、保護者も含めた学校関係者が多く集まる学園祭というイベントの数時間前にだ。

どう考えても、学校側としては体裁が最悪だ。しかも、それを整

える時間すら与えないタイミングでの事件。

普通なら一発退学間違いなしの所行だ。しかし、
「不公平か・・・まあそれが通るのも、あのメンツだったからだろうな。俺一人とかだったら、間違いなく退学だったと思うわ。」
そうはならなかった。

理由は簡単。今回、御用となった俺たちは、皆が皆、成績がいいか、特殊技能を持っているからだ。

まず、川島と木島。こいつらは先月行われた模試で、東大B判定をたたき出している。しかも、それは高三の先輩が受ける模試での話だ。つまりこの結果は、こいつらが現時点で、東大を受けようと思っっている連中のトップにしていることを示している。

こいつらはもう既に高校で学ぶことのほとんどを自学で終わらせてしまっているので、普通の高一の俺たちが受けるようなテストを受けていない。

一度連中に、なんでそんなに成績がいいのかと聞いたことがあるが、

奴ら曰く。

『あ？だって、ああいう問題って、答えが決まってるからさ、解けるだろう？なあ、木島。』

『うん？なんだ？スマン、聞いてなかった。』

ぶち殺してやろうかと思った。

ちなみに、これは俺たちがまだ中学生だった時の会話だ。

このときからこいつらはこんな感じだった。

当然、こいつらの頭ならもっとランクの高い、それこそ、国内でもトップの高校を目指せただろうが、こいつらは、地方の中堅どころの高校に進学した。

この理由がまた凄い。

『別に高校なんてどこだっていいし、お前らと一緒にまだ遊びたいから、お前らと同じところに行く。』

このとき、俺も江藤も七夜も成績は同じくらいで、別に進学とい

うことに關して大した思い入れもかったもんだから、ちょっと頑張れば入れるような、つまりはこの常磐高校を進学の第一志望にしていた。

それにこいつらは引ッ付いてきたわけだ。

むろん、こいつらは勉強をさぼりたくて、こんな選択をしたのではない。

こいつらは、勉強以外のことを？？突き詰めて言えば、勉強が囲いきれないものを学ぶために、この選択をしたのだ・・・と、思う。というか、そう思わないとやってられない。

次に七夜。

こいつは・・・よく分からない。

というのも、こいつがどういったスキルを持っているかということとを、こいつ自身が、他人に絶対口外しないためだ。そしてそれは肉親であろうと、例外ではないらしい。

ただ、分かることもある。それは、こいつが、ときどきだが、FBIの人間と仕事をしているということだ（一種の都市伝説）。

どういった経緯をたどればそうなるのか、こいつに聞いてみたことがある。

『ルールに従っているのは、やれることは限られてくる。ときには、その制限が致命的なまでの穴を生み出すことにも繋がる。俺がやっていることは、その穴埋め作業のようなものだ。おかげで、ついた二つ名がパッチボーイだ。』

ださいネーミングには触れず、これで十分だろうと黙る七夜に、もうちょっと分かりやすく、お願いしてみた。

しかし、こいつはそれには答えず、

『尊敬している人がいた。』

と、突拍子もない話をしだした。

『その人は紛争仲介人なんていうばかげた仕事をしていた。世界を巡っては、銃を持ってけんかする連中の間に命がけで飛び込んで、

その喧嘩を止めて回っていたんだ。』

紛争仲介人？なんだそれ。仕事か？

『一銭にもならないことだ。だから、仕事と言えるかどうか分からない。それに、その仲介という行為に、いたいどれだけの価値があるかも分からない。でも、その人はそれを続けていた。』

・・・。

『そして、そんなことをひたすらに続けて、遂には俺が中一のに、どこの馬の骨とも分からんやつに銃で打たれて死んだ。』

・・・。

『そのとき思っただ。倫理はルールを内包するが、ルールは倫理を内包することは出来ない。つまりは？？』

・・・。

『今までの話は全部嘘ということだ。』

このとき。

俺は、『ふり長い上に、オチがない！』と突っ込みを入れたただけだった。

そのときは、それで会話は終了。

そしてそれ以来、この話はしていない。

だから、あいつが語ったことが単なる戯れ言だったのか、それとも、悲しい真実だったのか、今となっては確認するすべはない。・

・いや、まあ、聞けば良いんだけどね。別に、死別したわけでもないし。てか、本人と毎日顔あわせてるんだし。

閑話休題。

で、つぎは江藤か。

七夜の話の後にこいつを持ってくるとあれなんだけど、こいつの特技はある意味、前者の三人の誰よりも凄い。

その、恐るべき特技というのが、「人に好かれる」というものだ。こいつの友好関係がいったいどれだけ広いのかは、自称親友の俺も完全に把握できていない。

通常、交遊関係が広いと、それに反比例するように、各個人との繋がりは弱くなっていくのが世の常なのだが、こいつの場合は違う。多彩（さまざま属性をもった）な人材と強固な繋がりを持っているこいつは、今回の教師のような対場の人間からすると非常に厄介で、つまるところ、こいつにちよっかいをだしたとき、どのだれにどんな影響が出るか分からないのだ。

例としてあげるなら、こいつを今回の件で退学処分としたとき、最悪、どこぞのお偉いさんが怒鳴り込んでくる可能性だってありうる（そのお偉いさんは、江藤の親戚でもなんでもない人）。

まあ、つまるところ、凄いのはいつじやなくて、こいつの知り合いっていうだけの話だ。

で、最後に俺か。

俺は、別に他人を圧倒するような特技を持っているわけでもなければ、成績がずば抜けていいわけでもない。

ただ、江藤や、川島や、七夜や、木島。

こういった連中と友人である俺は、別に俺自身は何もないんだけど、「ああいう人たちの仲間なんだから、ひよつとして、あの人も・・・」なんていう、意味不明な「昇像」が一人歩きた結果、「爪を隠した能ある鷹」と勝手に勘違いされているのだ。

ある意味、巻き込まれ型人生を歩む俺の特技と言えなくもない。

とまあ、こういったクセのありすぎるメンツを一度に高校からほっぽり出すと、進学面に関しては明らかに学校側の損失だし、また、何が起こるか分からないため（特に江藤）、通常は退学レベルのことも、停学二週間なんて軽い罰ですんでいるのだ。

「だろうな。あのメンツだったから、俺たちはこんぐらいで・・・って違う！おい、ちよつと待て！なんかこの一連の会話だと、俺がお前らと一緒に不法侵入やらかして馬鹿やったみたいに聞こえる！・・・そうか、そのためか！わざわざ俺をあの場に呼びつけたのは！

お前・・・」

「まあ、いいじゃん。停学なんてもん、たいした問題じゃないだろう？ お前がいなけりゃ俺たち退学だったかもしれないし。それ考えたら安いもんだ。もし、俺が逆の場合だったら、例え事情をちゃんと知ってても、俺はあの場合に行ってたぜ？ お前はどうか？ もし、俺がああとき正直にぼやのことを話してたら、お前は来なかったのか？」

この、すばらしき友情を再確認しようとする馬鹿に対し俺は、
「行く分けねえだろ、この馬鹿野郎！ ああメンツなら、俺居なくても退学になってねえよ。お前は、俺だけが文化祭楽しむのが気に食わないから、俺を巻き込んだだけだろうが！」

と言ってやった。この俺の返答に対しあの馬鹿は、
「バレたっちゃ！ てへ！」

と言。

いらんキャラ作りをしているのが、正直きもくて、
ブッ♪

と、受話器をおいて、会話を一方的に終了させた。

『 六花・第六章 女二人の祭り囃子 』

「どうぞ寄って行って下さーい。お化け屋敷です。カップルの方とかいかがですか。二人の距離が急接近するかもですよ。」

お化け屋敷をやってる4組の前で、オーソドックスな幽霊にコスプレした女子生徒が、死んだ人のものとは思えない元気のいい声と笑顔で客引きをしている。

「・・・」

そんな幽霊さんとお化け屋敷をじーっと、見つめる我が親友。

「優花？」

「・・・」

どっちかって言うと、優花の恨めしそうな表情がすでに幽霊な人だよと、・・・というか、目つきが危ない人だよと、そう伝えたいだけなのに、今の優花には自分の名を呼ぶ声すら聞こえないらしい。

「優花ってば！」

もうちょっと強い口調で読んでみる。

「・・・」

うーん、これでも駄目か・・・なら、

「優しいお花の妖精さん？」

「そのネタを今度引っ張りだしたら絶交ね。」

最終兵器を出すまでよと、軽い気持ちで言ったみたら、超反応で絶交予告をされてしまった。

「う、うん。もう言わない。もう言わないからその拳を納めて？ね？」

しかも、正拳突き of 構えで。

メトウ君ならまだしも、私なんて一発の半分でも致命傷だ。

「・・・」

「でもさ、せっかく二人で回ってるんだから。もうちょっとどうにかならない？さっきからいくら話しかけても、ずっと上の空じゃない。そんなに昇君が恋しい？」

「うん。」

頬が熱い。こっちが照れるよ。そんな齒に衣着せぬ言い方されたら。

「そう？なら、放課後に昇君家に寄る？ていうか、今からお祭り抜け出して、昇君家に行く？」

「うーん、それは・・・」

「どうしたの？」

言いよどむ優花。私の隣で若干16歳の親友は、還暦迎えたおばあちゃんみたいにモゴモゴと口を動かし、ついで「はあ」と悩まし

げな吐息をついて、

「なんか、それはどうかと思うんだよ。だってさ、そういうのって、違うでしょ？　そういうのって、つき合ってるって言わないでしょ？」

と、持論を展開。

展開ついでに視線も転回。お化け屋敷から視線を外し、グラウンドへ。

つられて私もグラウンドを見る。

目につくのは「魔球を打ってみよう！」とか、「ビンゴでシュート」とかの体育界系の出し物だ。

そのためか、室内と幾分か活気の質が違うようだ。

でもまあ、それはおいといて。

「じゃあ、どんなのがつき合ってるって言うの？」

質問してみる。

恋においては経験値の高い優花だ。何か意味はあるんだろうけど、私は別に良いんじゃないのかなと思う。彼氏に会いに行くぐらい。先生の話だと、昇君はなんか巻き込まれただけの可能性もあるらしいし。

「えっとね、」

そう言っただけで黙る優花。

お、優花先生の講義が始まるのか？と、聞き入っていると。

今まで2階の窓からグラウンドを眺めていた優花は視線を私に合わせ、

「わかんない。」

という微妙な一言。

「・・・」

「・・・」

お互い無言のまま、今更面白くもない顔を見つめ合う。

こうして私たちのユルい文化祭は過ぎて行く。

これはこれで良い気がするけれど、なんか物足りないなという気

にもなる。

それを優花に話したら、「秒速」見ようと提案された。なんでも、DVD BOXを買ったらしい。

だけど、DVD見れるのは放課後になってからだ。

だから優花に当面は何をするのかと聞くと、

「あれとかは？」

とグラウンドを指差された。

その指の先には「魔球を打って見よう！」の文字。

「良いけど・・・あれって、絶対ボールに細工してるでしょ。なんでボールが螺旋を描きながら飛んでるの？重心をずらしてるのかな？あ、今度は分裂したよ。あれはどうなってるんだらうね？」

まあ、いいか。気分転換にはなるだろうし、なによりも。

「ひまねー。」

そう、優花が言うように、暇なんだから。

『六花・第七章 空想化された現実』

DVD観賞後、いろいろあって優花の家に泊まることになった。

そして今、私はお風呂をいただいている。

「ふう。」

肩までとつぷりと湯船につかり目を細め、この一言を言うと、なんか一日を締めくくれるような気がして、自然とこわばっていた肩の力が抜ける。

お風呂というのは本当に気持ちがいい。それが、自分のうちのお風呂でなくてもだ。

だから私にとって、お風呂はなくてはならないものなのだ。これがないければ、絶対に明日なんて迎えられないと思う。

「・・・」

そんなお風呂に先ほどから浸かっているのに、全くもって、開放感を得られない。

先ほど優花と見た、「秒速5センチメートル」のせいだと思う。

その物語は短編連作アニメーションという、かなり変わった形の物語だった。

物語は3話で構成され、一人の男の子を軸として、各エピソードが展開されて行く。（だからといって、各話の主人公がその男の子であるかという点、そうではない。）

そんな話の中で、優花は第一話の「桜花沙」というエピソードがお気に入りらしい。

主軸である男の子の、幼年期を描いている話だ。（ちなみに、第二話は男の子の高校生時代の話で、第三話は男の子が大人になってからのもの。）

でも、わたしは違う。

どのエピソードが好き、嫌いの話以前に、あの物語自体を受け入れられないのだ。

理由としては、子供じみていてなんだけど、ハッピーエンドじゃないから。（優花的には、あれはあれで一つのハッピーエンド、とのこと。）

「・・・」

私はアニメをそんなに見る方ではない。でも、だからといって、全く見ないというわけでもない。

「あれは・・・アニメ・・・なのかな？」

アニメというのは非現実だ。

“現実”ではないのだ。

だから、アニメには空想が内包される。あるいは、空想そのものが、アニメと言っているかもしれない。

そう、空想なのだ。アニメは。

大きな苦難

強大な敵

それらを打ち破る正義の味方

未来のロボット

異世界

ヒーロー

運命的な恋

伝説の武器

魔法使い

ありえない絶望やあり得ない希望が闊歩するのがアニメーションの本質。

それなのに??

「あれじゃまるで、空想化された現実じゃない。そう、思っていることを口に出してしまった。」

現実で夢が叶う事なんてほとんどない。

だけどそれは、アニメだって同じこと。

何でもかんでもうまくいくなんて、アニメでもない。

でも、アニメと現実が違う。アニメには、現実ではあり得ない困難??もっというなら、私たちの傍には無いおおきな「何か」???があつて、そのために、夢がといえるのだ。

だからこそ、仕方ないと諦められる。

そう、仕方が無いと。

「・・・」

諦められるの???

（いつまでもそういうふうには居られないよ。だって、生きるってことはそういうことだもの。）

いつだったか。

魔法使いを名乗るお姉さんに言われた言葉。

（あなたが大事にしまってるその「願い」はいつか穢される。でもそれは決して悪いことではないの。）

あの人は誰だったんだろうか。まさか本当の魔法使いだったのだろうか。

「やっぱり、「永遠」なんてないのかな。」

在りし日の想いを持ち続けるなんて不可能なのだろうか。

時間とは、日常とは、生きることとは、そんなにも強力な「変化」なのだろうか。

なら、それならば、本当に人があらがえないほど強力な「存在」だというのなら。

それは？？自分以外の「何か」であってほしい。

そして、それは特別な「何か」で、その辺に転がっているようなものではなくて……

それならば、それに出会わない限り、私は「願い」を抱いて生きて行くことが出来るはず。

しかし、それがたんなる「日常」だと言うのなら……

「だいたいなんで私と名前が一緒なのよ。意味分かんない。」
もう、やめよう。

出てくる言葉も、空っぽになってきてるし。

こんなことはお風呂に浸かって洗い流してしまえばいいのだ。

だって、所詮あれはアニメ。あれは、“現実”ではない。

「だからもうちょっとこのままで。」

そう呟いて、天井を見上げていると。

「長過ぎだよ！明里！」

全身素っ裸の親友が飛び込んできた。お風呂場に。

そして仁王立ち。

手にタオルも無いことから、隠す気はゼロだとわかる。

優花のスタイルは良い方ではないけれど、健康的に引き締まった親友の身体は芸術の分類に入と思う。

でも、なんか違う。

「・・・優花、優花は女の子だよ？それ、ちゃんと分かってる？」

恥じらいとか、おしとやかさとか、その他諸々を二階に置き忘れてきたらしい親友は、いつも私が女らしくないというけれど。

今の優花には言われたくない。

「見れば分かるでしょ？何をいまさら。」

そう言って、身体をすぎだす親友。

さつき優花はお風呂に入ったばかりだから、これは二度風呂というのかな？

「ねえ、優花。女の子ってどういうことだろうね。」

一度確認しておく必要がある。自分がおかしいのか、親友がおかしいのか、はたまた私たちが二人そろっておかしいのかを。

「それは哲学的な問題だね。」

そうかな？まあ、そうか。

「うん、哲学的でわるいんだけど、今一度確認しておきたくて。」

からだをすぎ終わった優花はこれまたなぜか、当然のように湯船につかうとする。

ぱっと見、無理っぽいけど。

ちよっと空けて、と無理矢理お湯につかうとする親友のために、膝をたたんで一人分のスペースを確保する。

「ふう、そうだね、女って言うのはね・・・」

いつのまにか「女の子」から「女」になっているけれど、大した違いは無いのかな？

「女とは？」

答えを促す。すると、親友はあっけらかんと宣った。

「わかんない。」

「・・・」 (私)

「・・・」 (優花)

こうして夜は更けて行く。

今夜分かったことは、アニメにもいろいろあるということと。

自分の親友が予想を遥かに超えるおばさんだということだった。

そういう風に、

わたしは、

自分をごまかした。

文化祭から2週間が過ぎた。

そう、つまり、今日から彼らが学校に帰ってくるということだ。当然彼も。

「上機嫌だね、優花。2週間ぶりの再会はそんなに楽しみ？」

「からかい半分で優花に訪ねる。」

「うん♪」

ころころと笑う優花。そんな親友の笑顔を見て。

ピシリと心がきしむ。まるで、ガラスか何かにひびが入るように。

「そっか。そうだね。優花は昇君が大好きだもんね。」

一度自覚したその傷は、どんなに目を背けようとも、私を蝕む。

「まあね。でも、昇の方はどうなんだか。私のことを大切に思ってるなら、あんな馬鹿なことしないはずだし。」

またピシリと音がする。

「昇君も同じに決まってるじゃない。あの日の昇君、プライドも何もかもかなぐり捨てて、ひたすら平謝りだったじゃない。」

文化祭二日目。

この日、私は二つの真実を手にした。

それは、彼の？？昇君の優しさと、そんな彼と優花の二人の絆の強さ。

「うーん。そうかな？そうなのかな？」

そしてもう一つ、私は手にすることになった。

「そうだよ。優花はいいな。昇君みたいなすてきな恋人がいて。わたしもそんな人欲しいな。」

自分の歪み。意地汚い、そんな、自分の歪みを。

「なくにいつてるの？Mr. パーフェクトを振った明里さん？そんなに恋人欲しいなら、受ければ良かったじゃない。あの人、女子の間じゃあ、かなり評判良いんだから。昇よりもね。まあ、私は昇の方がいいけど。」

ピシリと音がする。その人の名を聞いたびに、音がする。

「頭が良くても、顔が良くても、スポーツできても、私は別に彼のが好きじゃないし。だからつき合うって言う気にもなれなくて」

「そうだ。つき合うって言うのはそういうものじゃない。そんな、俗物的なものじゃない。」

「じゃあ、どんなひとが好みなの？明里は。」

それを、私に？？聞くな。

そう、一瞬でも思った自分に愕然とし、次の瞬間にはこれまで味わったことの無い敗北感に襲われ、

「わかんない。」

と、弱々しい声を絞り出すので精一杯だった。

「なにそれ。まあ、そう言うこともあるよね。明里に見合うくらいだから、それ相応の人じゃないとやっぱ駄目だよ。・・・てか、案外メトウもヘタレだね。あるとき、結局あいつから何のアクションも無かったんでしょ？」

そんなことはどうでも良い。

それこそ、どうでも良いことなんだ。そんなことは。

「うん、なくんもなかったよ。それはそれで良いんだよ。あつたらあつたで困るし。」

メトウ君なんか、どうでもいい。

彼があの日、例えば何かをしていたとしても、私の選択が変わることとは無かった。

「ふくん。昇はね？？」

その名を、私の前で、親しげに？？呼ばないで。



謹慎組の5人は、生徒指導の川村先生につれられて教室にやって

きた。

一応、反省してるっぽい顔付きのメンバー。・・・本心はどうだか知らないけど。

彼らは朝一のホーモルームで教壇に立ち、それぞれ皆に謝罪した。ホーモルーム終了後、先生に言われたからなのか、自主的にやっているのかは分からないが、各人改めて皆に謝って回るということもしていた。

そこには当然のように、巻き込まれただけの彼の姿も。

彼は別に悪くないに。

「明里。マジで今回はすまなかった。」

メトウ君だ。さすがに、しでかしたことの大きさを分かっているのか、やたら素直に謝る。

「私は良いけど、皆にはきちんと謝っておいてね。特に優花には。でないよ、殺されるよ?」

元凶はこの人だ。

そう、すべてこの人が悪い。全部、この人のせいだ。だから、彼は??悪くないんだ。



その日。

優花と彼は、今までと変わらずに??まるで、謹慎期間なんて無かったかのように??いつも通り過ごしていた。

これまでと変わらずに、そう、出会った頃のまま、過ごしていた。それはまさしく、私が望んだはずの??

「永遠」の、欠片だったんだ。



秋閉幕

冬

『桜花と六花・幕間』

桜と雪。

一見して共通項が見えないこの二つに、実際のところ多くの存在が何らかの形で惹かれる。

なぜ惹かれるのか、なぜ魅了されるのか。

まあ、これは単純な話で、単にこの二つが美しいからだだろう。そんなに深く考える問題でもない。

これらの美しい「花」の名を授けられた二つの存在は、その美しさゆえに多くのものを惹き寄せ、魅了してきた。

あるときは何かを癒し、あるときは何かに哀愁を与え、またあるときは……

いずれにせよ、これらの花はその美しさゆえ、多くの存在に様々な影響を与えてきたのだ。もちろん……

それは、この二つの花自身も、例に漏れず、己自身によって強い影響を被ったであろうということは想像に難くない。

「世界のあり方」

より抜粋。

『桜花と六花・終幕』

ふーん。珍しいね。「願い」はあるのに、それが見えないなんて。

とても能天気なお姉さんはアイスをコーンに乗せながら答える。本人がいうには魔法使いで女子高生らしいけど。女子高生にもなって魔法使いとか言うのはどうかと思う。ちなみに、今遊園地でアイスを売っているのは別に生活費を稼ぐためではないらしい。なんでも、それは極秘任務の最中で、その内容をばらすとめっちゃくちゃ怒られるらしい。

はい、アイスクリーム。これおまけね。

そういつて魔法使いのお姉さんは自分が食べていたポッキーをアイスにさしてくれた。お母さんとお父さんが来てくれるのを待ちながらアイスとポッキーを食べる。

しばらく黙って食べていると、お姉さんが話しかけてきた。

多分ね、あなたは「願い」が見えないんじゃない。見ようとしただけなんだよ。だって、見てしまえばあなたの「願い」は今のような無色透明のきれいな花ではいられなくなるからね。

お姉さんは続ける。

あなたの世界の形はともきれいな雪の花。それも、かなり大きくなってしまっている。いやー、そんなにきれいで大きい世界は私も初めて見るよ。確かにそれが世俗の色で穢れるのは他人の私でももつたない気がするな。

ポッキーをポリポリかじりながらお姉さんは続ける。

でもね、いつまでもそういう風には居られないよ。だって、生きるってことはそういうことだもの。あなたが大事にしまってるその「願い」はいつか穢される。でもそれは決して悪いことではないの。

お姉さんが遠くを見つめる。潮時かな？そういつてお姉さんは店じまいを始めた。まだ昼間だというのに。

最後にお姉さんは私に振り向いて言った。

でも大丈夫。きつとね。どれほど見えづらくでも、あなたの「願い」にはきちんとした形がある。だから後はあなたが勇気を出すだけ。それだけであなたの「願い」はすぐに見つかるよ。だってそれは、世界中に満ち溢れているものだから。

そして、「じゃあね。」と言い残し、お姉さんは走り出した。何かから逃げるように。そして、それを追うのはどう見ても警備員さんだ。

違うって、おっちゃん！私今迷える子羊を助けてたんだって！

そう喚くお姉さん。だけどお姉さんを捕まえたおじさんはものすごい形相で怒鳴っている。

このバカたれ！お前は今なんのためにここに居る？アイスクリーム売るためか？あ！マイル坊主に言いつけるぞ、あいつは今でも寝る間を惜しんで頑張ってた。なのにこのバカたれは！星は逃げちまったよ！お前がアイス売ってる間に！ほれ次行くぞ！やつの行った先くらい分かるだろう。さっさと準備しろ！

そういつて、連行されるお姉さん。なんだか、ドナドナドーナって歌いたくなってくる。なんだったんだろう。不思議な人だったな。

この後、この魔法使いは世界中の者から、トラブルメーカーの二つ名を頂戴することになるがそれはまた別の話。

『桜花と六花・最終章 花降る町』

「違うんだよ……。優花……。違うの、私は別にそんなつもりは……。」

どうしてこんな風になってしまったんだろうと考える。雪が降る町を駆け抜けながら。

今の自分がしている行為にひとかけらも意味は無い。どれほど考えたところで答えはでないし、どれほど走ったところで逃げられない。けどそれをせずにはいられない。もし、今考えることを止めてしまえば、あるいは走ることを止めてしまえば、私は壊れてしまう……。

最初は全然違和感なんてなかった。昇君とのことを幸せそうに話す優花を見て私も幸せだった。優花のことを話す昇君を見て幸せだった。お互いを大切に思いあっている二人。そんな二人が幸せそうにしているその風景が私はとても好きだった！なのに……。

いつからだろう？

それを見るのが苦しくなったのは。

いつからだろう？

それが私にないものだ気づいたのは。

いつからだろう？

あの二人を見るとこの胸が痛むようになったのは。

「優花は私の親友で、昇君は私の親友の恋人！なのに、なのに、なんで、なんで……。」

いつからだろう？

彼の笑顔が私を苦しめるようになったのは。

いつからだろう？

幸せそうなあゝの二人を見て私がそれをねたむようになったのは……。

いやだ！いやだ！誰か、誰か助けて！

声にならない悲鳴を上げる。声にしなければ聞こえないのに。声に乗せなければ誰にも届かないのに。

空から延々と降り続ける雪。もうそれすらもわずらわしい。こんな馬鹿みたいにたくさん雪は降ってくるのに、救いはひとかけらも降ってはこない。わかっているよ、そのくらい。救いなんてもの、簡単に降ってくるわけではないんだ。だけど、だけど今だけは、誰か……誰でもいいから……、誰か助けて！

♪

そう、救いなんてものはそんな簡単には降ってこない。当たり前だ。もし、そんな簡単にそれが降ってくるなら、世界に不幸な人間なんていなくなる。

空を見上げながら昇はそう思う。

（結局のところ君にはそもそも願いなんてものがないんだ。）

あのとときの言葉、かつては理解できなかったあの言葉の意味も今なら分かる。

（いや、あるにはあるが、君の願いは、はっきり行って情動に近いものだ。君以外の者もそれは当然持っているし、大多数の者はそれを満たすために「願い」を持つ。）

そうだ。俺の願い。形のない、ただ馬鹿みたいに大きいだけで、その実、中身が空っぽな、そんな自分の願い。

どれほど望んだことか、それが叶えばいいと。どれほど待ち望んだことか、それをもたらしってくれるものが現れればいいと。でも、そう、きつとこれは叶わない願いなんだ。だって、

ただ単に「幸せになりたい」などという、そんな漠然とした空っぽな願いが叶うはずがないのだ。

先ほどから目に涙をためて泣きじゃくる優花を抱きしめる。優花は気づいていない。明里さんが走り去った本当の理由に。いや、ひょっとすると明里さん自身それに気づいていないかもしれない。だからそれを伝えなくてはならない。俺たちは気づくことができ、優花たちが気づけなかったひとつの真実を。

明里さんを見つめ続けた江藤と、そして自分を見つめ続けた俺の二人だったから気づけたホントに馬鹿みたいで、でも大切な、そんな願いと「願い」の話。

「優花。」

優花を強く抱きしめる。愛しいこの娘が自分の「願い」なんだろうか。自問自答する。

……。はは、いや、違うな、この「願い」は俺の「願い」じゃない。これは明里さんの「願い」だ。俺はたまたまそういう「願い」があるのを知っただけで、俺の願いが「願い」になったわけじゃない

い。

もう一度空を見上げる。あいも変わらず、雪が降り注ぐ。救いではない、ただの六花が。

「大丈夫だよ。優花。」

そう大丈夫だ。空を見上げながらそう思う。

確かに救いは簡単には降ってこない。簡単に救いはもたらせるものではない。

でもだからといって、救いは絶対に手にすることができないものでもない。

幸いなことに、明里さんのそれはさきほど走っていった。

8ヶ月だ。そう8ヶ月。あいつはそう望み続けた。明里さんの横に立ちたいと。あの娘を守るそんなやつになりたいと。

だからあいつならきつとなれる。俺はそう思う。簡単ではないそれに。多くの人間が望んでも手にすることができないそれに。だってあいつは・・・。

彼女のことが本当に好きなんだから。



「おい！明里！」

追いつかれてしまった。しかもよりもよってメトウ君に。本当に最悪だ。いや、話しかけないで！今はあんたみたいな馬鹿に付き合ってられないの！だからあっちに行って！

そう思うのに声が出ない。だから当然メトウ君はしゃべり続ける。

「俺はお前をずっと見てきた！入学式の日からずっとだ！」

知ってるわよそのくらい。だから何よ！なら分かるでしょう！あんななんか大嫌ってことくらい。だから向こうに行って！

メトウ君が近づいてくる。逃げたい。あれから逃げたい！でも足が動かない。なんで？どうして！

「だから分かるんだ、お前は昇のことが・・・」

目を閉じる。はっきりと言葉にされてしまえばもう逃げられない。もう、どこにも逃げ場はない。だからもう・・・はやくこの苦しみを終わらせて。こんなわけが分からない苦しみを、さっさと終わらせて。私に言って、お前はクズだって。それが私が欲しかった最後のピース（答え）だって。



「何言ってるの？昇。言ってる意味が分からない。だって、そんな・・・」

戸惑う優花。まあそうだろうな。俺が言ったって、伝わらないだろう。でもそれでいいんだ。だって、これは俺の「願い」じゃない。

明里さんの「願い」なんだ。だから・・・。

「きちんとしたことは明里さんから聞いてくれ。これは俺じゃきちんと説明できない。そうだな。あるいは江藤のほうがちんと説明できるかもしれない。でもこれは優花がちんと明里さんと向かい合って聞くべきだ。」

でも・・・と優花は口ごもる。

「でも・・・でも私、明里にひどいこと言った。もう口なんてきいてくれないかも！って何すんのよ！」

どうやら優花は凹むとどこまでも凹むみたいだ。そんなの似合わないから鼻ピンしてやった。めっちゃ怒ってるけど、そっちの方が優花らしい。

「心配すんなって。信じろよ。あいつを。今回はしくじらないよ、あの馬鹿は。ホワイトクリスマスなんだ。奇跡ぐらい起きるって。」

えらく根拠がない適当なことを言う俺に優花がキレた！

「なにそれ！メトウ頼み？最悪！こんな肝心なところであの馬鹿頼るなんて信じらんない！もういい！自分で行く！あいつ頼るくらいなら、木島頼った方がまだ何ぼかましだわ！じゃあね昇！あんたはそこで童話の待ちぼうけおじさんみたいに突っ立てなさいよ！私は行くから！」

そう言って走り出そうとする優花の手を掴み、敵意むき出しの優花を自分に引き寄せてキスをした。

$\vdash$
 $\bullet$
 $\bullet$
 $\bullet$
 $\circ$
 $\perp$

だいたい3秒くらいだったと思う。そつと唇を離す。ここから先は記憶がない。その理由はというと・・・

「死になさい。」

という優花の一言と共に、俺の意識が消失したから。

「だから分かるんだ、お前は昇のことが・・・」

メトウ君からの宣告が下る。求めていた答えではなかったけれど、仕方がない。そんな答えに導いたのは自分だから。

そう思い、観念してメトウ君と目を合わせる。なんか入学式のときを思い出す。あの時はメトウ君の予想外の言葉に動揺させられたけど、今回はさすがにない。分かりきった答えを彼から聞くだけなのだから。

一旦言葉をためて、彼は黙り込む。止めてくれるかと思ったけど、そうは行かないみたい。無情にもメトウ君は再び口を開く。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

そしてメトウ君の口からでたその言葉を聴いたとき、私の中の最後のピースが大きな音を立ててきれいにはめ込まれるのが分かった。だけどそれと同時にひどく戸惑う自分もいる。だって、メトウ君が言ってる意味が分からなかったから。

「お前は・・・、明里は昇のことがうらやましいんだよ。」

『 六花・最終章 氷解 』

何を言ってるの？と思う。私が昇君をうらやんでる？優花じゃなくて？昇君を？

それはおかしいことだと思う。だって、親友と付き合ってる異性に嫉妬するなんてそれじゃあ・・・まるで・・・。

「ごめん、メトウ君。あいも変わらずあなたの言っている意味が分からない。その・・・多分だけあなたはとんでもない勘違いをしていると思うんだ。だってその理屈からいくと・・・」

そう、それはあり得ない。異性である昇君と私が、私と同姓の優花を取りあう。メトウ君が言っているのはそういう構図だ。でも、だってそれじゃあ女である私はレズということになる。別にレズが悪いかいいうことじゃない。でもメトウ君がしている話はそれが前提でなければ成立しない。だけど私は絶対に違う。だって私の願いは・・・。

「いや、勘違いしているのはお前だよ、明里。俺が言っているのはお前が考えているようなことじゃない。いや、正確に言えば、お前があえて目をそらしていることだよ。明里。」

そう、絶対に普通なら変だと思うメトウ君の言葉。なのになぜ・・・。

私の心はこんなに落ち着いているのだろうか？

「もう分かっているだろう？お前は昇のことが好きになって、あの二人と一緒に居るのを見るのが辛くなったんじゃない。お前があの二人を見て辛くなるのは、お前が叶えることの出来ていない「願い」を昇が叶えてしまっているからだ。しかも、昇はそれを望んで手に入れたわけじゃない。ただなんとなくだ。あいつがお前の「願い」

を手に入れることが出来たのはたまたまだ。だからお前は納得がいかないんだ。」

「もういいよ。江藤君」

これ以上好き勝ってには言わせない。人が黙って聞いてれば意味が分からないことをべらべらと。はつきり言って、不愉快だ。

「なにそれ。私が、私が昇君を見て胸が苦しくなるのは、昇君が幸せそうだから？ 昇君が私の叶えたかった願いを叶えて幸せそうだから私は嫉妬してるって言うの？ あはは、そうだね。それくらいのことは私はするかもね。だって私はクズだもん。分かってるよ、そのくらい。でもね、はつきり言って、それは違う。私はクズだけど、そこまで落ちぶれちゃいない。勝手なことやって私の全部を理解した気にならないで。はつきりいって、気分が悪い。」

彼を傷つけるには十分だったと思う。それぐらい私はひどいことを言ったんだ。なのに彼は怯まない。

「もちろんお前の全部を理解しているわけじゃない。こんな短期間で全部を理解できるほどお前は浅い人間じゃないよ。明里。」

先ほどまで苦しくて苦しくてどうしようもなかった心が落ち着いている。彼の言葉を聴くたびに静かになっていく。でも、それは決して怒りのせいではない。なんで？

「ここからは俺の勝手な想像だ。根も葉もない。ひよっとしたら聞く価値すらないかもしれない。でも聞いて欲しい。俺がどれだけお前を見ていたかということ。」

返事を返さない。いや、返せない。それはつまるところ彼の行為を肯定することだ。私は彼の話を聞くということ。

「沈黙は肯定なりだな。」

そう言ってメトウ君は私をまっすぐに見据える。私だって目をそらさない。この話はそうしないと伝わらない、そんな風なものに思えたから。息を一度深く吸ってメトウ君がしゃべり始めた。

「俺はお前と出会う前から昇とつるんできた。覚えてるだろ？ 昇と榎本が付き合うきっかけになったあの放課後のことを。」

当たり前だ忘れるわけがない。だけどそれがどうした。それとこれと何の関係がある。

「あの時俺はお前に言ったよな。あいつは夢見てるんだって。あのときはぼやかした言い方した。だけど今はそんなことする必要ないし、しちやいけないと思う。」

「……。」

「昇の夢、あいつの願いは「幸せになりたい」なんだ。」

「……何それ？」

「何だその漠然とした願いはと思うだろう？俺も始めて聞いたとき思った。だからあいつに聞いたんだ、「いや、だからお前の幸せはなんだ？こうなったらいいなって願いがあるだろう？」って。そしたらあいつなんていったと思う？笑えるぞ、あいつは、「分かんない。けっこう自分でも考えたんだけど、俺にとって何が幸せか分かんないんだ。そりゃあ、時たま幸せかなと思うこともあるけど、はたと考えるとほんとにこれが俺の幸せか？って思うんだよ。」って言ったんだ。真面目な顔で。だから最初はこいつ相当馬鹿だなと思った。だってそうだろう？天然さんでもない限りこんな発想にはならないからな。」

メトウ君は続ける。

「だから、こんな馬鹿となら長く付き合っても退屈はしないだろうと思って、つるみ始めたんだ。でもさ、付き合ってるうちに分かるじゃん。あいつが馬鹿じゃないってことくらい。それどころか、「こいつこんなとこまで見てんだ」って驚かされるくらいよく物事をあいつは見てる。だからさ、つるんでるうちに、そんなあいつが言ったあの言葉が何の考えもなしに出たものとは思えなくなった。」

雪はまだ降り続けている。でもそれはもう気にならない。目の前の彼の言葉だけが私を包んでいる。

「だからずっとつるんで馬鹿やりながら、ずっとあいつの言葉の意味を考えてた。だから分かったんだ。あいつには願いがないんじゃない。あいつの願いに見合う「願い」がないんだ、ってことにな。」

・・・意味不明。からかってるのかな？この期に及んで。そう思ったのが顔に出たのだろう。メトウ君が慌てて口を開いた。

「いや、普通さ、俺たちが考える「願い」ってさ、明確な形が無いにしてもぼんやりとした輪郭みたいなものがあるだろ？でも結局それってさ、そもそも俺たちの「幸せになりたい」っていう根本的な願いが形を持ったようなものだ。だから俺たちはふつう皆二つの願いを持ってるっていえるだろ？俺が言いたいのはそういうこと。たぶん昇の「幸せになりたい」という願いは、強すぎるんだ。そんな風に強すぎる願いに、あいつは形を与えてやれてないんだよ。普通俺たちがイメージするような「願い」という形を。だから、はたから見ればどう考えても幸せだろうっていう状況でも、あいつは心のそこから幸せだと感じれないんだと思う。」

「・・・・。」うん、メトウ君、分かるよ、君が言いたいことは。でもさ、

「それと私と何の関係があるの？」

思わず聞き返してしまった。それに答えず、彼は質問に質問で返してきた。

「お前の「願い」はさ、俺が思うにだけど、「誰かと一緒に幸せになりたい」だと思う。これは、あの入学式の日からずっとお前を見ていて思ってたことだ。違うか？」

「・・・・。」何も言い返せない。まさにそのとおりだったから。でも・・・・。

「だから何？それがなんなの？確かにそうだよ、あなたの言うとおり。私の「願い」は「素敵な人と一緒になること」だよ？でも、だから？それが何？それが今回のこととどう関係があるの？確かに、私の「願い」を優花と一緒にいることで昇君は叶えてしまっている。でもね、優花は今まで昇君以外の人も付き合ってる。でも私はそんな優花たちを見ても全然平気だった。今回みたいな惨めな気持ちにはならなかったよ？それにメトウ君がいうとおりなら、私は優花に嫉妬してるってことにならない？それなのになんで昇君なの？意

味が分からない。」

ほんとはもう分かってるのだ。さすがにここまで来れば。でも、だからこそ、ここまで来たからこそ、私は彼の口からその答えを聞きたい。私が自分自身のことなのに、ついぞ今日という日まで気づくことのできなかつたのでしなかつた、その答えを。

「お前と榎本は違う。なんていうか根本的なところがだ。だからお前はいくら榎本がお前の「願い」を叶えていたとしても、所詮は他人の「願い」のようにしか感じることはできなかつたんだ。でも、昇は榎本とは違う。あいつはお前と同じなんだ。いや、お前と昇が同じといった方がいいか？ お前らはもとの「幸せになりたい」っていう願いが大きすぎるんだ。」

「……。」彼の答えを待つ。

「そしてここからがややこしいことなんだが、そんな風に似たもの同士のお前たちも完全には同じじゃない。もう分かってるよな？ 昇は「幸せになりたい」という願いを形のある「願い」に作り変えることができていない。それに対してお前は大本の願いをきちんとした「願い」という形に作りかえることができていて、でも、お前はあやふやな願いをきちんとした「願い」に作りかえることができていても、結局叶えることができていないでいる。それはそもそも「幸せになりたい」という元の願いが大きすぎるものだから、それに見合うように生み出された「願い」も当然大きくなっていて、結局お前は見つけることができずに居るんだ……。そうだな、昇が自分の願いに見合う「願い」を見つけられていないとしたら、お前はお前の大きすぎる「願い」に見合う相手を見つけないことができずに居ると言ってもいいかもしれない。いずれにせよお前たちは結局のところ大きすぎる自分の願いに振り回されてるんだ。お前と昇が幸せを感じることができない理由は違うけれども、結局お前たちは同じ結果に落ち着いている。」

「……。」

「でも、それは俺からお前たちを見た結果だ。お前はそういう風に

考えていないと思う。たぶん、なんとなくだけどお前は前から、無意識にだけど、気づいていたと思う。お前と昇の共通点に。そしてそのせいで、お前たちがそれぞれの願いを叶えることができないということも。」

「。。。。」

「じゃあ、実際はどうか。一見すると昇は幸せそうだよな？はたから見ればさ。でもそれは本当はそう見えるだけで、本当のあいつの幸せじゃない。榎本には悪いけどな。」

「。。。。」

「そして明里、お前は自分と同じはずの昇だけが、お前の「願い」を叶えているように見えて、うらやましく思ったんだと思う。お前の気持ち分かるよ、お前自身は叶えることができていない、そんな「願い」をたまたまあの放課後に手に入れた昇がうらやましくないはずはないもんな。」

「メトウ君。。。」 思わず彼の名を呼んでしまった。

「でもな、明里、はっきりいって本当にそう考えているならお前はゴミ人間だと思う。だって、きっかけはあの放課後だったかもしれないけど、今のような二人になったのは昇と榎本の二人が頑張ったからだ。その努力を直視せずにただの結果だけを見て他人をうらやむなんてクズのすることだ。」

「。。。。」

「だから、俺がきっかけを与えてやる。あのときの放課後にあいつらにそうしたみたいにな。今度はお前にな。」

「。。。。」

「俺と付き合ってみろ。そんな馬鹿みたいに大きなもんにしがみついてないでな。俺はたいした人間じゃないが、お前のことが分かればお前の「願い」に近づくことくらいはできるはずと思う。どうだ？」

「。。。。」 彼は私の知りたかった答えを答えてくれた。だから今度は私が答える番だろうなと思う。

あの日も雪が降る夜だったと思う。確かお父さんとお母さんと私の三人で夜ご飯を食べに出かけたんだ。私の誕生日祝いもかねて。

そのとき、ご飯を食べながらいろんなことを話してもらった。どうやってお父さんとお母さんが知り合ったのか。そしてどんな経緯を経てふたりは一緒になったのか。

他にもいろんな話を聞かせてくれた。私がお母さんのおなかの中にいると分かったときのこと。それから私が生まれるまでのこと。そして私が生まれたときのこと。

そんな楽しい時間はあっという間に過ぎていった。そして、ご飯を食べ終わった後、火照った体を冷やすために会計を済ませてるお父さんを残してお母さんと二人でレストランの外に出たんだ。

そして、お父さんが出てくるまでのほんの少しの時間だったけど、こんなふうに雪が舞い降るレストランの先で、お母さんと話をして、あの指切りをした。

そして思ったんだ。私もこんなふうに幸せな二人になりたいと。

でも、そんな幸せな日々は今では過去のものとなっている。

別に二人が離婚したとかじゃない。今でも普通に三人仲良く暮らしている。どこにだしても恥ずかしくない、そんな家族だと思う。でも……。

あの日の、あの六花が降り積もる町で私が見た、あの私の「願い」を生み出した二人の面影は今はどうどこにもない。

別に二人の仲が悪いというわけではない。二人は今でもお互いのことを愛し合っていると思う。

でも、今の二人に、あの日の輝きはない。あんなにきれいだった二人の姿はどこにもない。

私は永遠だと思ってた。あの二人の輝きは。

だけど、実際は永遠なんてどこにもなかった。だから私は結局自分から何もすることなく・・・

自分の「願い」、「永遠の二人」なんていうばかげたものを追いかけるのを止めてしまったんだ。

メトウ君を見る。

本当になんなんだろう、この人は、いつもはちゃらんぼらん振りをしていて、肝心なところでは少しかっこよくなるけど・・・、それもしまりのないものばかりだ。彼のいいところを探す方が難しい。悪いところならいくらでも見つけられるのに。

だけど・・・

「ずいぶんな言い草だね。私の中で告白ってかなり綺麗なイメージがあったんだけど、見事にそれに背を向けた告白だよ。今の。」

「・・・。」メトウ君が珍しく黙っている。何か調子狂っちゃうよな。

「でも、そうだね。メトウ君の言うとおりだと思う。私が今まで甘えてたんだ。自分から手を伸ばしめせずに勝手に綺麗な世界をイメージして、それが現実にはないって知ってまた勝手に絶望して。」

「・・・。」メトウ君はまだ無言。

「だからね、うん、今日から頑張ってみようと思う。幸い手を伸ばしてくれた人が居てくれたからね。こんなクズみたいな私のために。」

ホントに世界はめまぐるしく変わっていくんだね、お母さん。こんな人にこんな感情を持つ日が来るなんて夢にも思わなかった。

「私と付き合ってください。メトウ君。こんな私でよければ、ぜひ。」

最後の方は恥ずかしくてまともに彼を見ていられなかった。思わずうつむいて言ってしまったが、メトウ君にはちゃんと伝わっただろうか。そう思っておそろのおそろの前を見る。

「・・・。」

瞬間、百年の恋が冷めた・・・。

おそらく、メトウ君はかなり最後までかっこよく決めたいと思う。だからシリ阿斯な顔をしてるけど・・・。

口がにやけすぎ。鼻膨らみすぎ、拳握りすぎ、顔赤すぎ、それなのに目だけが笑ってないなんて、どう考えても気持ちが悪すぎる。どうしよう。いまならクーリングオフの期間内かな？訂正するなら今か？そう思ったときに彼が口を開いた。

「そうだな。明里。いい判断だ。俺と付き合えばお前はかなりの確率で幸せになれる。だがな、よく考えてみると、ひとつ肝心なことを忘れていた。お前にどうしても治してほしいところがある。そこが直らない限り、お前とは付き合えない。」

「・・・何？」なんだろう？この期に及んで。だいぶん私の汚いところを見せているはずなのにまだあるのだろうか。

「あのな俺はメトウじゃない。江藤だ。別に名前で呼べとは言わないが、せめてメトウは勘弁してくれ。」

「・・・ごめん。江藤君。」

あまりにもメトウ君暦が長すぎてこんなときにも彼をメトウ君と呼んでいたなんて自分でもいわれるまで気がつかなかった。自分もメ・・・江藤君のことを言えた柄じゃないな。そう考えると私たちは案外似たもの同士なのかもしれない。・・・なんだかイヤだけど。

こうして私と江藤君は付き合うことになった。かなり遠回りした気がするけど、それでもいいのかもしれない。

江藤君と付き合うことで、結局私の世界は壊れてしまった。でも、そんな悪いこととは思えない。

多分、これが生きることだと思う。いつか誰かが言っていたみたいに。そして私は今のこの私の世界を・・・とても愛している。

冬・閉幕

『桜花・最終章 二度目の春』

明日と今日の境界ってどこだろうな？

0時じゃない気がするんだよ。だって、24時超えても起きてたら、なんだか次の日になった感じがしないもんな。

無邪気な疑問。しかしそれは・・・。

てかさ、さっきと今の境界ってどこなんだろうな。それが無いなら、今日も明日も同じもの
だと思っんだよ。

きつと誰もが無意識に抱きながら、しかしその多くがそれがなんであるか認識しないまま通り過ぎていってしまう、そんなもの。

なあ、昇。お前はと思う？明日と今日の境界。それはあるのかな？

かつて江藤に聞かれ、答えられなかった無邪気な疑問。

だけど、今なら答えられる。その答えは「無い」だ。

だって結局のところ今日も明日も同じものだ。さっきと今が同じものであると同じように。

でも、それはすべてのことが永遠だというわけではない。なぜなら結局のところ物事なんて主観の問題だからだ。

どのように世界を見つめるか。

結局それこそがこの、「境界の無い無形の世界」を認識する、あるいはこの世界に境界を引くための唯一の概念。

もう、桜の季節だ。一年前と同じ、ただ少しだけ違う桜花の季節。

「昇？。速く！もう明里たち着いてるってよ！早くしないと桜が散っちゃうよ！」

一年前と同じこの季節が少し違って感じるのは世界が変わったから？それとも俺が変わったから？

「速くって言うてるでしょう！マジで桜が散っちゃうって！比喻じゃなくて！なんでもメトウ君が桜を蹴って、人工的に桜吹雪を作り出してるみたい。川島君たちは止める気ゼロらしい。だから私たちが止めないと！メトウ君の息の根を！」

きっと俺が変わったからだろう。なら、ひょっとしたら、「あのときの俺」じゃなく、「今の俺」なら、あるいは自分の願いを「願い」にすることができるようか？

「?????????。」

そろそろ優花の相手をしないうな。俺を変えてくれた本当に大切な人たちの1人なんだから。

ふわふわと幸せそうに風に舞ってばかりで、その実自分というものを持っていなかった俺を・・・

「いい加減にしろ！この朴念仁！何であんたは春になるとヘタレに

なるの？一足速い5月病？さっきから呼んでるのにボーっとしちや
ってさ。ほら行くよ。メトウ君の息の根を止めに。」

そう言っただけの手を無理やりひっぱて行く優花。まったくこれじ
ゃ、一年前と変わらないな。でもまあいいか。気長に見つけていく
としよう。俺の願いに見合う「願い」を。

「優花？！こっちこっち！早く江藤君を止めて！ホントに馬鹿な
の！私の彼氏！早く！」

馬鹿みたいに陽気な青空の下、江藤が自分の彼女に息の根を止めら
れようとしている。優花・・・だからなんで彼氏の前でそんな顔を
する？百年の恋も冷るぞマジで。

「はー。まったく何やってんだか。」

さてまた始めるとしますか。いつもと同じやり取りを。いつか俺の
「願い」になるかもしれないそんな馬鹿みたいな日常を。

二度目の春・開幕

END

あとづけがき！

一般的に「変化」というと、なぜか能動的なイメージがある。そして、それは別に僕に限ったことではないと思う。たぶんだけど。

で、この物語はその「変化」と、「変化」の対極に位置する「不変」？？？つまりは「永遠」が主軸となっている。

とは言っても、本編を読んだ方の中には、そんなたいそうな話だったっけ？と思いいなる人も少なからずいるはず。だって、日常ものだもんね、この話。そして事実、この物語はホームページのカテゴリー的に「日常」に分類している。

まあ、つまるところ？？？この物語からは、「日常」というものは常にこの「二つ」を内包する矛盾した存在であると考えている僕の独断と偏見が読み取れるともいえる。

・・・わかりにくので、たとえば話を2つほど。

例えば（１）、「よし、今日から勉強頑張るぞー」とやる気満々だったはずの昨日が、一日二日経ってみれば、もうすでに遠い過去・・・。

例えば（２）、「マジ暇なんですけどー」とか言いたくなるくら

いに朗々と流れる時間とか。

この二つの話を例にしても、前者が「変化」で後者が「永遠」とした場合、どちらもよく日常で体験する話だと思う。

時間と空間は切り離して考えることは出来ない。

だからもちろん、人も然りでしょう。

ただ、

そうであるならば、同一時空内の人が抱えるこの矛盾はいつたいゼンたいなに？というところからスタートしたのが、この物語、「桜花と六花」。

まあ、前述の文が問とした場合、それに単純明快な解を出すとしたらそれは、主観（あるいは意識？）の問題でしょ？で、片がつく。

m p; #9831;

& a

この物語においては、明里がこの「矛盾」の代表例である。

明里という登場人物は「永遠」の冠を冠っている「愛」を探し求めている。がしかし、場面によっては、「永遠」を忌避するような一面を見せる。

そのひとつとして挙げられるのが、「刺激の無い日常を嫌う」というそれだ。

不変

「永遠」とは「

「不変」の対局に

「変化」

「不変」と「変化」の内

包者である日常



あなたにとっての日常と

は「変化」ですか？

それとも、「永

遠」ですか？

あなたにとって、「生きる」とい

うことは？？？なんですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6161n/>

桜花と六花

2010年11月3日01時15分発行